



「歴史の散歩道」は市史編集委員であった故芹沢充寛氏が昭和60年5月から平成4年4月まで「広報すその」に連載していたものです。

「広報すその」の電子化に伴い抽出・並べ替えを行い読みやすくしました。

歴史の 散歩道



芹澤充寛

二条為冬

堀野市平松に佐野原神社があるが祭神は「二条為冬」である。

為冬は、藤原俊成、定家、為家と続いた和歌の家系に生まれ、為家の子が二条家、京極家、冷泉家に分かれ、その二条家の一員として育った。

父為世、兄為道らはいづれも勅撰集の撰者として活躍し文学史に記録されている。

軍記物太平記巻十四「箱根竹之下合戦事」に「……是ニテ中書王ノ……臣下トクノミ思食タリケル二条中将為冬討レ給ヒケレバ……佐野原ニモタマリ得ズ……海道ヲ西ヘ落テ行ク」と箱根山を背水の陣とした足利尊氏軍の前に後醍醐天皇方の官軍は敗退し、為冬はこの闘いのなかで佐野原附近で戦死し



佐野原神社にある二条為冬の碑

たことが描かれている。時に建武二年、古典増鏡は、南北朝時代の歴史物語であるが第十三秋のみ山「……御歌合……池の御船さしよせて、左右の講師隆資、為冬のせらる。」と為冬が歌合の講師を勤めていることを記している。

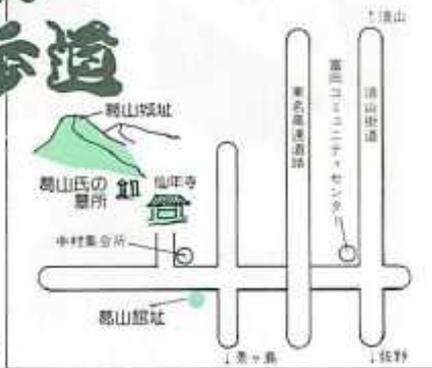
為冬は、和歌と書の芸術家であった。和歌は三十首ほど残しているが手がたない表現であり、書も落ちついた筆はこびをみせている。

京の賀茂の臨時祭に詠んだ歌を紹介すると、

音さゆる みたらし川にかけ見えて
袖をつらぬる駿河舞かな

為冬は、尊氏とは親しい友人であったが王朝文化をとおして人間的魅力を感じ合つたにちがいない。不幸にして社会情勢は極めてきびしかったのである。為冬は、世の中が平和で、その一生を京都で終えたならば、勅撰集の撰者として文学史に名をとどめたであろう。中世の悲劇の芸術家、歴史を豊かに見ていく史蹟、学問の神様として祀りたいものである。

歴史の 散歩道



芹沢充寛

葛山五郎景倫

据野市葛山・愛鷹東麓に中世の遺構
葛山城址と城主館址が残されている。

葛山氏は、駿東地方最大の豪族であり、吾妻鏡、円覚寺文書(一三〇七)など中央の動向にも登場し、鎌倉時代から戦国時代に至るまで長い間在地性を保ちながら活躍してきた。

葛山氏の人物の中から葛山五郎景倫について紹介しよう。

景倫は、源家三代將軍、実朝に「恰かも影の形に随う如く忠心あり」と記されるように側近として仕えた。

実朝は「金櫛和歌集」を残し、京の王朝文化に憧れていたが承久二年(一二一九)二七歳の若さで暗殺された。この時、景倫は実朝の命をうけて宗教上の目的で宋(中国)に渡るため九州博多で準備をしていた。実朝の突然の訃報に、景倫は悲嘆のうちに高野山に登

り出家し、願性*の法名で実朝の菩提を追悼したのである。

この願性のもとに心地覚心という青年の僧が入ってきた。覚心は後に宋へ留学し、死後、後醍醐天皇から法灯国師、後村上天皇から円明国師の諡号を贈られるほどの高僧となったが願性は生涯を通しての師であり法友であった。また尼將軍政子は、景倫の忠心に報ゆるため紀州由良庄の地頭に任じたが景倫は高野山の金剛三昧院、由良の興国寺などの創建を行った。

これらの出来事は、史料物価値の高い吾妻鏡、濠洲国宝記、円明国師行実年譜などに記されている。

景倫は、葛山三郎景忠の長男に生まれ、葛山の風土の中で育ち、鎌倉を舞台に活躍し、晩年は紀州で宗教人として終えたものであろう。

約七五〇年前という遠い昔のことであるが史料を通して文化的、内面的にも洗練されている景倫―願性を、中世の典型的な人間像として思い浮べることができる。



ここに葛山城が…

歴史の 散歩道



芹沢充寛

宗祇

愛鷹東麓、黄瀬川の清流の辺り、桃園の地に定輪寺という古寺がある。

そこには、中世の大芸術家、連歌の花の本宗匠、宗祇の墓所があるが元は閑静な奥の方であった。

宗祇は、俳句を尻取のように連想し詠み続ける「連歌」という世界的にも特色のある詩の形式を創りあげた。また新撰葉歌波集などの編集者となった。

文亀二年（一五〇二）越後への旅の帰路、箱根湯本で八二歳の生涯を終えて富士山麓の定輪寺に葬られた。

宗祇の高弟、宗長は「宗祇終焉記」に「……駿河の国のさかひ、桃園といふ所の山林に会下あり、定輪寺といふ……杉あり、梅桜あり、為にとりおさめて、松をしるしになど……」と宗祇を葬むる様子を名文で記している。

宗祇三〇〇年忌に地元の人々が石灯籠を献納し、五〇年毎に偉徳を偲んで俳人が全国から集まり句会が催されたものと思われる。

四五〇年忌に建てられた句碑には、なべて世の風をおさめよ 神の春が刻まれている。

この句は、応仁の乱で京の都が廃虚となった時代、折から三島に滞陣中の東常陸に古今集の講義を受けた時であり、動乱の世が治まり、わが子の病の平癒を祈願し三島大社に献句した三島千句のなかの一句である。

また、桃園橋のほとりの句碑には、世にふるもさうにしぐれの 宿りかな 人がこの世に生をうけたのは時雨の ような仮の宿の意であるが、ここには憂愁といおうか無幸福感を漂わせた宗祇のもう一つの心がある。

宗祇は、よく旅をしているが生涯が漂泊の詩人であった。もつとも人生そのものが旅人であるのかもしれない。

郷土の俳諧文芸は、近世からこのよ うな土壌の中で伝統的文化を創りあげてきたものである。

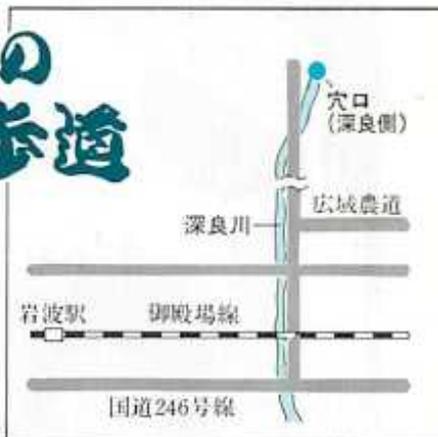


定輪寺にある宗祇の墓所

歴史の 散歩道

芹沢充寛

④



友野与右衛門

深良用水は、江戸浅草の町人友野与右衛門と深良村の名主大庭源之丞の出会いがなければ実現しなかった。歴史は、やはり人間が創るものである。

与右衛門は、寛文二年（一六六二）には湖尻峠を踏査し調査を行ったと思われる。寛文十年に深良用水の完成、元禄元年（一六八五）用水支配を解かれて惣ヶ原の元締屋敷から退去するまで、少なくとも二十三年間深良用水と共に生きたのである。資本家としては倒産状態で失意のうちに去っていったであろう。

用水工事は、町人請負なのか、小田原藩等の公共工事なのか二説に分かれているが、いずれにしても開墾時のことは公的記録に残されていない。

与右衛門らの役割を否定しようとする時代の意思が働いていたのであろう。

か。

与右衛門らは、寛文三年「欽白立願状之事」を箱根神社に納めた。

立願状は、箱根大権現、東照大権現にたいし、「……湖切貫キ新田ヲ企テ所願成就……」湖水を掘り貫いて新田の開墾事業が実現できるよう、そのために各種の修行を誠意をこめて行うことを誓約し、実現した時には二百石を御神領として奉納するとしている。

その筆跡を見ると友人の書家は「与右衛門の筆勢や筆の運び、書の形などの印象では、心の躍動感を感じさせ、個性豊かな人物であったであろう」と感想を述べている。

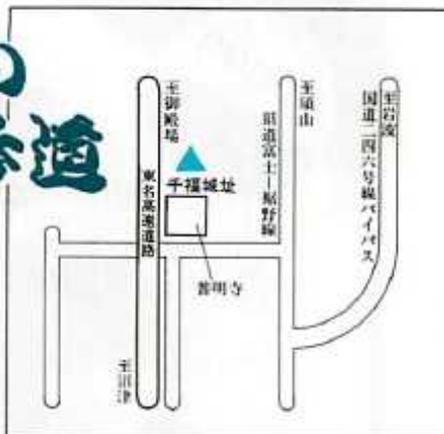
立願状には、自然の改造、資本の投下、技術の駆使、そして利益を計るという一つの価値観が読みとれる。

そこには、自由で積極的な生き方があり、今日の人間像の原型を見ることができよう。同時代の町人文学、西鶴と同質のエネルギースえ感ずる。

深良用水は、与右衛門らの最高の共同作品であるが製作者から離れて、独自の生命力を発揮し、豊かな文化遺産として永く受け継がれていくであろう。



穴口（深良側）



歴史の散歩道

芹沢充寛

⑤

御宿監物友綱

中世に活躍した郷土の豪族、葛山一族は、魅力ある人物を輩出させているが御宿監物友綱もその一人である。

友綱は、戦国時代に天下統一の夢をかけた英雄、甲斐の武田信玄の家臣として活躍した。

葛山氏は、永禄十二年？（一五六九）信玄に亡ぼされたが武田家臣団に組みこまれ在地性を失うことをおそれた行動が裏目に出たものだろう。

信玄は、天正四年（一五七七）駿東地方の名家葛山氏の名跡を六男貞貞に継がせ御宿監物友綱が後見人であることは千福「普明寺文書」に記されている。

友綱は、葛山氏元の弟ともいわれ、すぐれた武人である。詩と歌に通じた教養の持ち主であり、信玄がわが子を託すに足りる器量人として認められたもの

だろう。

友綱の手柄を知るうえで一つのごとがある。

越後の上杉景勝が謙信の死後、跡目相続に際して内紛が生じた。この時、景勝は武田勝頼に援助を求めて黄金二万枚を贈った。ところが武田の重臣、長坂釣閑と跡部大炊はそれぞれ五千枚を受領したことが伝わり武田軍の士気が低下したというのである。

それに憤慨した武田の武將、小山田備中昌行と御宿監物は詩と歌を詠んでやりとりをしている。

備中昌行から監物へ

「すな金を一朱もとらぬ我等さへ」

うす恥かく数に入るかな」

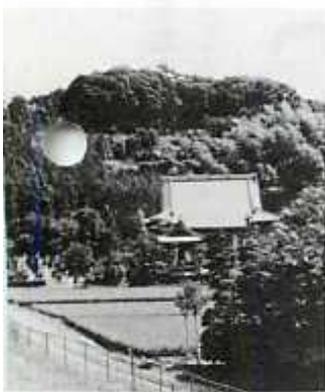
監物よりの返し

「うす恥をかくは物かな」

なべて世の寂滅するも金の所行よ」

友綱は、黄金が人の心をゆがめていく世のはかなさを詠っているが現代にも通ずるものがあろう。

友綱は、信玄を評する、病状を伝える貴重な資料「御宿監物書状案」を残しているが天正八年（一五八〇）に武田勝頼の認可を得て本領を嫡男若丸に譲った。天正一〇年、武田氏は織田信長の追撃に天目山で亡びたが友綱はそれ以前に亡くなったと思われる。

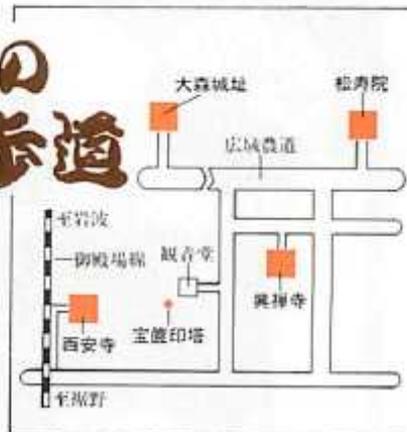


普明寺の裏山に千福城址

歴史の 散歩道

芹沢充寛

⑥



大森惟康と大森氏頼

裾野市深良に、大森天神が祀られている。深良は、中世の豪族、大森氏発祥の地として知られているが大森氏が存在したという痕跡を見ることが出来る。

例えば、大森城址、大森氏由緒の宝篋印塔、西安寺・興禪寺・松寿院の開基や中興に関する寺記と伝承、南堀・堀ノ内・鍛冶屋敷・城ヶ尾等の地名、家康七カ条定書の大森ふから、西安寺と南堀の天神社の「大森天神」の伝承などである。

また深良中学校建設に際し、丘陵上から土塁と空堀を検出したが素朴で、「城」と云うより、「砦」であり中世前期という時代からみて大森氏が築いたものであろう。

大森天神は、二人存在するようだ。西安寺に伝わる大森天神は大森惟康

である。惟康は、いずれの資料をみても大森氏の祖は平安時代の中園白道隆の子——内大臣伊周としており、惟康はその孫にあたる。伊勢新二郎と号し康平三年（一〇六〇）、三河国高橋庄から甲斐、駿河国司として封任し、伊勢斎宮御領の大森深良の地に土着したものと思われる。

南堀の天神社に伝わる大森天神は大森氏頼である。

氏頼は少年時代から智略にすぐれ、関東の争乱に際し平定に大きな役割をはたし將軍足利義政から信頼された武将であり文化人であった。

氏頼は、小田原の大森氏が関東でもっとも勢力を示した時の小田原城主であり、上杉定正の驕慢をいましめた有名な「教訓状」を送った人物である。

大森氏は名僧を出し崇仏事業に力を注いでいるが、それは当時の文化事業でもあった。氏頼の開基、中興によるものは西安寺・興禪寺・松寿院であり、定輪寺・普明寺に援助を与えたと伝えられている。

天神というと書や和歌など学問の神様を連想させるが各寺院を通して人々に文化をもたらしたのであろう。

大森天神は、人々と大森氏との繋りを示すかのように思われる。

【参考】深良神社雑考 大庭景申著



西安寺山門

歴史の 散歩道

葛山八郎氏元

芹沢充寛

⑦



裾野市葛山に城址と城主館址を残す葛山氏は、鎌倉時代から戦国時代に至るまで三百数十年間、郷土の支配者として活躍してきた。

吾妻鏡などに登場するので活躍してきたことはたしかであるがその姿は明らかではない。葛山八郎氏元は、戦国時代にふさわしい生き方をした葛山氏最後の城主であった。

氏元が出した文書は、天文十一年一五四二、光長寺文書に始まり、永祿十二年（一五六九）芹沢文書で終りとする四十四点を残し、実に二十七年間の長きにわたっている。

戦国時代の地方の一領主が時代の波にどのように対応したのか氏元の行動の一面を追ってみよう。

天文十四年、今川義元に従い北条氏康方の長久保城（長泉町）を攻撃包圍

する。同十六年、冷泉為和、葛山八郎の邸（静岡市）で歌を詠む。同十八年今川義元の命により織田信広を三河に攻める。永祿十二年、武田方の葛山氏元らは北条方の富士氏の守る大宮城富士宮市）を包圍攻撃する。

氏元は、今川氏に属する中で小田原の北条氏と結び、また今川氏に従い、さらに武田氏に従うという弱肉強食と下剋上の世を身をもって延したのである。松平記には「ここ瀬名、葛山、朝比奈等を初め、我先にと甲州へ降り……」また「……三年も過ぎるに、葛山は……甲州にてむほんを起し……信濃諏訪にて一門五人、張付にせられける……」と今川氏から武田氏に降った葛山氏元一族がたどった運命を記している。

氏元は、武田信玄が約束を反古にしたのか、存地性を失わせるようなできごとと直面したのか不明だが、いづれにしても信玄に討たれたであろう。

裾野地方の人々は温厚醇風の気風があるなかで、氏元は決断力、忍耐力、政治的識見にすぐれ、それに文人としての素養をもった人物であり、郷土の英雄といっても過言ではないと思う。



葛山氏の墓所

歴史の散歩道

芹沢充寛

⑧



三好維堅

三好維堅は、弘化四年（一八四七）
据野市佐野に生まれた。

三好家は、吉田神社の由来の中にも
記されているとおり代々医を業とする
家柄であった。

維堅の足跡の一端を見てみよう。

幼少時に、伊豆山神社に入り日吉宮
司から国学を学んだ。富士宮浅間神社
の神官植松家へ植松真一郎の養子名で
入り、王政復古に共鳴した神官グルー
プを中心に駿州赤心隊の結成に参画し
副隊長として活躍した。

慶応四年（一八六八）徳川慶喜討伐
のための有栖川大総督の東征軍を駿府
に迎えた。維堅二十歳の時である。

明治十年西南戦争には新政府軍の「火
工兵長」の任務で参戦、同十五年から
佐野原神社社殿建設に協力、同十八年
東山（箱根山林原野）入会訴訟に原告

佐野村代表として活躍、以後宮内省な
どに勤務、大正八年七十一歳で没した。
維堅は「西南戦争記」を残している。
日本人どうしが闘った戦場のできご
とを正確に、実にリアルに描写してい
るが単なる戦記ではなく維堅の視点が
明らかにされた貴重な資料である。記
録は、明治十年二月八日に始まり、同
年十月四日で終わっているが戦争の終
末時の九月二十四日、その一部を紹介
しよう。

「…新撰旅団ノ兵杖ヲ持シ長刀ノ柄
ニテ掘出シ洗ライシ切口ヨリ末々血流
レ出セリ然レトモ何者ノ首ナルヲ掘出
セシ者ハ知ラサリシヲ海軍少佐（薩摩
人ナリ）来テ西郷ノ首ナリト云ヒシヨ
リ予ハ幸ヒト傍ニアリシ首一見セリ…」
薩摩方の首領であった西郷隆盛の首が
土中から発見された時に立ち会った貴
重な体験を記している。

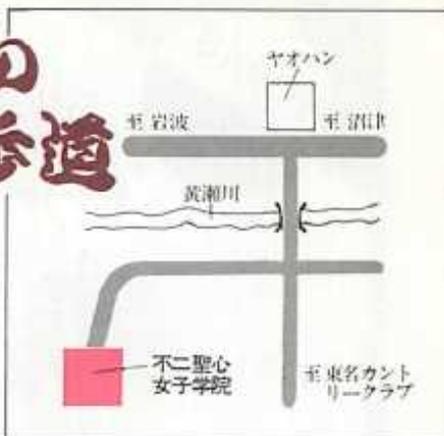
維堅は、明治維新という変革期に国
学を学びその思想に共鳴し、多感な少
年、青年時代を通じて活躍した思想家、
実践家であったと言うことができよう。
維堅は撫肩で細面の智的な顔立ち、
馬によく乗っていたと三好家では印象
を伝える。

資料三好米子様 写真三好純夫氏
西南戦争記は資料集として解説中。



三好維堅氏

歴史の 散歩道



芹沢充寛

⑨

岩下壯一神父

岩下壯一は、明治二十二年岩下清周の長男として東京で生まれた。

清周は、当時ヨーロッパの経済事情通の第一人者の財界人であり、壯一はそうした国際的な雰囲気や愛情豊かな環境の中で育った。

壯一は秀才であったがその生涯を通して内面的、外面的に実に多くの足跡を残しているがその一端を紹介しよう。

明治三十三年晩星中学に入りそこでカソリックの洗礼を受けた。一高から東大文学部哲学科に進学、卒業時には恩賜の銀時計を受け、大学院ではスコラ哲学を研究した。大正四年、七高教授として赴任。同八年文部省留学生として渡欧し、フランス、イギリス、イタリアなどの大学などで哲学・宗教学を研鑽する。同十二年インスブルック

で開催された万国カトリック青年大会などには日本代表として出席した。昭和五年から同十五年まで神山復生病院長として救癩事業に従事する。

同十五年十月興亜院の依頼で健康不調の中で中国へ、帰国後十二月逝去。五十二歳であった。

親友学友として安部能成、天野貞祐、和辻哲郎、西田幾太郎、九鬼周造、土井晩翠などの名を挙げる事ができよう。岩下神父の業績は、実に豊かである。青少年教育、女性の使命の自覚、家庭での信仰、スコラ学の研究、救癩事業、国際親善など多方面にわたっている。

戦前、キリスト教にたいする偏見があった時代に信仰と学問の信念からして、「信仰の遺産」や「中世哲学思想史」など独創性にあふれた著書をあらわしている。

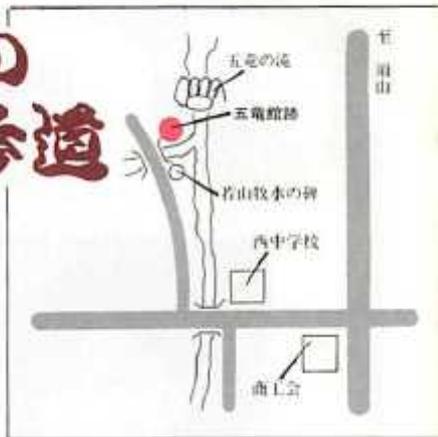
天刑病と社会から忌避された救癩事業に着手したのはテストウイド神父であり、復生病院は明治二十二年の設立である。岩下神父は六代目院長として、哲学者の神ではなく、生ける神としての愛情で人々に接したのである。

岩下神父は「自由独立の精神、洗練された知性、機智と諧きやくに富んだ人……」である。

なお、不二聖心女子学院の前身、温情舎小学校と不二農園は、神父の父が開設されたもので岩下神父の第三の故郷である。

※参考文献 救癩五十年苦闘史

岩下神父の生涯



歴史の足跡

湯山柳雄

芹沢充寛

⑩

湯山柳雄は、安政二年（一八五五）御宿村の名家、湯山半七郎の子として生まれた。その足跡をたどってみよう。幼少時代から聡明であり、沼津藩士烏津順道らに学んだ。

明治六年、柳雄十八歳の時、有志と共に行余舎を設けその教員として参画。同十四年、大庭唯吉、榊研三らと愛郷社を組織し政治思想の啓発に努めた。同十五年、岳南小学校の開校式典には全国の生徒から作品を募集し大展示会を催したと伝える。

同十五年五月、葛山村字登ヶ島で行われた「懇親会」では、「富強論・團結論・紅生説」などのテーマで演説が行われた。

また、御宿村ほか八カ村連合会議員戸長などを勤め地方政治の発展にたずさわった。

現在の中央公園の場所で「佐野ホテル」を経営し、大正十年歌人若山牧水、同十一年皇太子（現在の天皇）が米園されている。

愛郷社らの民権活動家は、駿東各地で政治啓発を展開し、明治十五年一月？岳南自由党に加盟した。ところが同年六月、新政府が集会条例を改め、それをうけて岳南自由党は、突如、新聞広告により解党を発表した。

わずか半年たらずの政治的、組織的活動であった。制約を受けても活動の持続は可能であったと思われるのだが、新政府の圧力の前に湯山柳雄ら豪農民権リーダーに限界があったであろうか。民衆が政治に参加していくという民権の主張は、民衆の政治啓発に与えた影響は科筆されよう。

それは成果の如何にかかわらず自由と民権という近代民主主義の原点の意義をもっていったからである。

湯山家当主、匡秀氏は、伯父柳雄について「教育家、政治家、事業家であるが江原素六、外国人との交流などモダンなセンスを持っていた」と伝える。柳雄は昭和七年に亡くなった。

「参考文献」資料提供湯山匡秀氏
東駿地誌 静岡県近代史研究



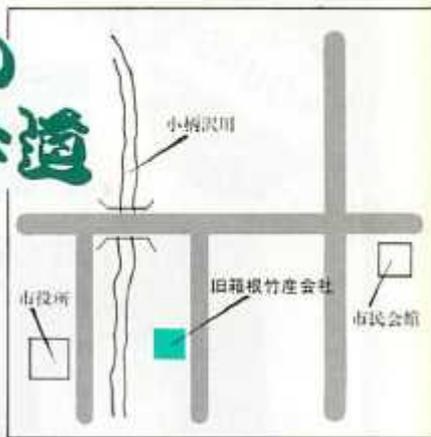
湯山柳雄肖像

歴史の 教歩道

福島 信太郎

芹沢充寛

⑪



福島信太郎は、三重県伊賀郡の漢方医福島玄河の三男に生まれた。

はじめは軍人を志望し上京したが、後にアメリカに渡った。

信太郎はアメリカ人の家庭に入り実践的に勉学に励んだ。また「怒りの葡萄」ではないが寸暇を惜しんで葡萄園でも働いたとも伝える。

カリフォルニアでは、立志伝中の人物、ポテト王として知られる牛島謹示に認められ、牛島農園一八〇〇町歩で馬鈴薯を栽培しその総支配人を勤めた。当時、移民が行われ日本では一定期間外国で働いて何年か後に帰ってくるのが常識であった。明治二十九年、「移民保護法」が制定されたが、アメリカでは植民的要素を大いに求めた時代でもあった。

明治四十年、服部大八（戸長を勤め

る）の次女せきと結婚した。せきは、財閥大倉喜八郎邸へ見習に上り、その時新しい文化に影響されたのか単身アメリカへ渡った。その船の中で知り合ったのが牛島謹示の友人渡辺金三であり、その縁で福島信太郎と結婚したのである。

同四十五年帰国、妻せきの郷里である裾野に定住したのである。

裾野では、次の諸事業を實踐し東海道線裾野地方の活性化を図った。

信太郎は、人々の中で討論し、よく面倒をみたとも言われ、民主的なリーダーシップを発揮している。平松新道の新設、裾野駅周辺の耕地整理、裾野演芸館を設立し映画・芝居・講演会など文化の導入、箱根竹産をおこし竹製品の輸出、地場産業の発展、箱根に別荘を設けサロンをつくった。労働と休養の必要性を説くなどアメリカで身につけた合理主義・人間尊重の考え方を日常活動の中で表現したのである。

信太郎は、「勉強がすべての価値を生み出す」という信念を持っており、単なる拝金主義者ではなかった。

昭和二十年八月、八十三歳で没した。

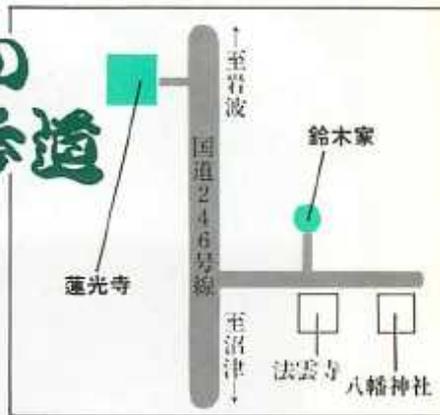


福島信太郎、長女みね子(4歳)
明治45年 アメリカにて

歴史の散歩道

牧水と秋灯 芹沢充寛

⑫



実、そして庭に植える樹木のいろいろ、父は心をゆるしてこの年若の友人に甘えているようだ」と秋灯さんについて記している。みさきさんが14、15歳のころで家族ぐるみの交際であった。

秋灯さんは、なお次のことを話された。現代は旅行者が多い。が旅人はいない。点から点ではなく、線から線へと自らの足で歩く旅人はいないのではないか。上高地へ旅した時、あまりにも美しい自然を前にして牧水が涙を流した。そこには自然と一体化した旅人の姿があった。また牧水はスタイリストで、着物をはしよった朴訥な格好もその一つであったという。

牧水と秋灯さんは、俗にいう「うま」が合う仲でそこには利害の入る余地もない友情で結ばれていた。

牧水は、昭和3年、44歳、沼津市千本で人生を終えた。

秋灯さんは満86歳、取蔵する多数の「牧水の道墨」を公的施設で後世に保存していきたいという意向を持っている。牧水は、裾野に宅地を求めたことがある。牧水の好んだ裾野の自然と人情を何時までも残していきたいものがある。

漂泊の歌人である若山牧水は、裾野に「歌」と「友情」というすばらしい文化を残している。

牧水の友人であり弟子でもある佐野の鈴木凌一翁（排号秋灯）に「牧水の道墨」とその想い出を語っていただきたい。

「私の家の前に蓮光寺という寺がある。本堂の裏に大きな椎の木が三本あった。牧水と連れだつてよく拾いに行つたものだ……」

どこやらのお寺のもりの椎の實は、はや白雪にうもれけむかも 牧水

返歌を添えて椎の実を贈つた

向ひなるお寺の杜の椎の木に

時雨はふれど雪はいまだし 秋灯

牧水の長女、みさきさんは「人間模様」のなかで「……父の秋灯さん宛の手紙には、おかしいほどおねだりと、

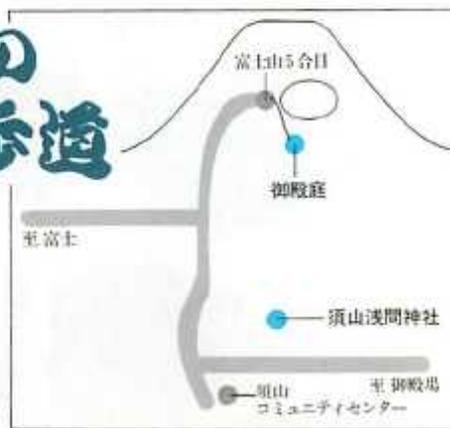
その札状が多い。畑のものの苗、椎の



鈴木凌一さん所蔵のとっくりと杯

歴史の 敬歩道

冠松次郎と
渡辺徳逸翁
芹沢充寛 ⑬



岳人であり俳人である冠松次郎は、木暮理太郎、田部重治、小島鳥水らとともに山岳文学を創りあげてきた。

筆者は、30数年前、高校山岳部に属していたので北アルプスや愛鷹山を縦走したことがある。

当時は、戦後間もない混沌とした時代で、山の紀行文や随筆は私たちの心を捉えたが、その中に冠さんの「山への味到」があった。

「富士の古道を行く。愛鷹・十里木行。秋の裾野行」などを読んで郷土の自然と民俗的な魅力を改めて認識したことを覚えている。

「……私と渡辺君とは左に廻って浅黄塚の腰を東白塚に向って下り、更に郡界の切開きに沿って十里木に出るのであるが、途中可なり下った処で道を右にとり違へた為……」と記している。渡辺君とは渡辺徳逸翁のことであるが、

自然と山を愛する友人への信頼感にあふれている。徳逸翁に冠さんの想い出を話っていたのだ。

「冠さんは、でっふりとした体格でおおらかな人柄、山仲間からは尊敬され絶対的に信頼のおける人間であり、良き指導者であった」さらに「小島鳥水さんが科学性に富んだ紀行文ならば、冠さんは俳人で詩情豊かな紀行文であった。日本登山史では黒部溪谷をよく知る岳人として執筆されている」

昭和32年、「富士山」のテーマで放送された冠さんを囲んでの対談は須山の徳逸翁宅で行われた。

翁は、同12年「静岡県郷土研究第九号」に「愛鷹について」を発表、富士と愛鷹山に関する研究の深さを示した報文であり半世紀を経た今日でも生きている。また裾野市の文化財の中で、「御殿庭」・須山浅間神社」などの指定、富士山資料館の設立など翁の識見に負うところが多大である。

日本の代表的な岳人や先人が好んで歩いた愛鷹東麓の自然をそこに住む人が深く味わいながら歩いて欲しいものである。

資料提供 渡辺徳逸氏



後のおがせ 冠松次郎(渡辺徳逸氏蔵)

歴史の 散歩道

大月桂月と
岩崎杏蔭

芹沢充寛

⑭



大町桂月は、文学史のうえでは明治の詩人、評論家、美文の作家として知られている。

酒と旅を好み、直言と直筆のため日露戦争の時反戦で物議をまねいたことがある。「花紅葉」「黄菊白菊」「筆のしづく」など今読んでみても実に名文である。

その桂月が裾野に幾度か見えた。当時、俳句の指導者であった岩崎宅を訪れたが箱根、富士山麓の農村の風景にも魅かれたものであろう。桂月は大正五年に富士山と山麓を歩いているのでその頃かもしれない。

桂月は「箱根山」の紀行文の中では岩崎宅の座敷から田植の風景を眺めていたようだ。田植の作業の流れを詳しく記しているが掛け声によって作業の内容が12段階に変わっていく。

オイヤッサー、タイギター、ソリヤード、カワラダー(カイグセ)、ソレヤ

イ、カイコター(カイコメ)、サーシロ、ハーヨーダ、ナラセなど馬の鼻取りとマングワをもつ2人が主役、側では大勢が活気をつくる。掛け声は、農作業の田植唄であり、労働のリズムであり、集団創作の唄でもある。

岩崎長康は、幕末から明治にかけて当地方で活躍した佐十郎の子であり俳号を、愛静居杏蔭と号し、先代の俳号九成にひきつづきやはり当地方の俳句の指導者でもあった。杏蔭は、桂月と酒を汲みかわしながら桂月の鋭い文芸評論を聴いたり、詩や俳句など文学論を交わしたにちがいない。一期一会とは、かような出会いを指すものではないだろうか。桂月と岩崎家を知るのは秋灯翁のほかにほもういのではないのか。

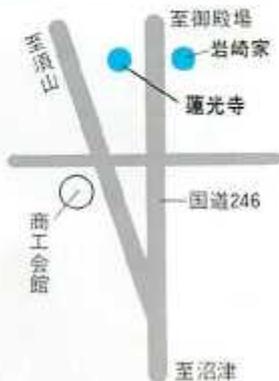
紀行文「箱根山」は、田植の農作業を知る貴重な記録となってしまった。文化遺産は、概して人間と人間との触れあいのなかに残る場合も多い。鳥崎藤村にお会いしたことがある秋灯翁が岩崎宅の隣人であったため記録を残すことができたのである。

資料 鈴木秋灯翁

杏蔭は、元岩崎亀市長の実父



桂月が滞在した岩崎宅



歴史の散歩道

岩崎家と九成翁

芹沢充寛

15

岩崎佐十郎は、文政10年(1827)福野市佐野に生まれた。

明治維新という時代の変革期に直面し地方の指導者として近代化を推進した一人であった。

わずか19歳で佐野村の名主を継ぎ、維新後は佐野村外12カ村の戸長を勤めた。その間、地租改正、教育制度の確立など指導性を発揮し、新町村制施行により小泉村の初代村長、静岡県会議員に選出、同副議長に選任されるなど幅広い活動を行った。

また、当地方での入会・水利慣行などをめぐる紛争などの調停役をつとめ、信望があつたと思われる。

佐十郎は、俳号を愛静居九成と称し当地方の俳句の指導者であった。

佐十郎は、幼少時から漢字、国学、さらに俳句を学ぶため、当時、江戸に国内留学されたという。

漢学塾を開いて当地方の青少年教育にあたった。岩崎家の「九成」杏蔭は地方政治に足跡を残しているがそれ以上に教育・地方文化を創りあげた豊かな土壌を残している。

前号に記したように例えば詩人大町桂月は岩崎家にとりもつとも多忙な年末年始、農繁期に滞在し推考を重ねたようだが忙しきに追われた家人の間では「良い印象ではなかった」と当主達生氏は談笑のうちに語っている。

岩崎家に残された文学作品には、当地方で活躍した俳人連水、著雨ほか桂月、牧水、虚子……中央で活躍された歌人の短冊など明治、大正期に交流した人々の作品が保存されている。

岩崎家には、多くの歌人が集まってきたのは九成、杏蔭に人を魅きつける人間的包容力や俳人としての世界を確立されていたからであろう。

九成は、出雲大社を崇敬していたが蓮光寺入口の右手に、正面「岩崎九成翁之墓」横面に、明治二十八年亡くなったことを刻んだ素朴な墓石が建っている。

九成の作を一句。

買いにけり

声を知りつゝ、懸想文

資料提供 岩崎達生氏市川幸子様



(右)長康(杏蔭)、(左)九成

歴史の教歩道

湯山半七郎

芹沢充寛

16



湯山半七郎は御宿に生まれ、明治10年代自由民権運動で活躍した湯山柳雄の実父である。

御宿には、上・中・下を付した湯山家があるが半七郎は下湯山である。

半七郎は、明治維新という変革の時代、日本が近代的国家に発展しつつあった時、地方で支えた指導者の一人であった。

明治新政府は、政治・経済・文化・教育の全てにわたり新政策をうちだし、鹿藩置県、地租改正、学校の開設など半七郎の活動の一端を駿東教育史でみてみよう。半七郎は御宿村戸長の職にありながら担当区域の各村々を巡視し、学校設置、就学督励、教員の任用や会議、伝習所の開催指導、各種試験の立ち合い、また時の県令大迫貞清の地方の巡察に随伴するなど精力的に職務遂行に努力した。のである。

湯山半七郎日記の一部

五月十日 雨天

- | | |
|------------|--------|
| 一 行余舎生徒小試験 | 一 八級七名 |
| 一 六級十名 | 一 五級三名 |
| 一 四級三名 | 合 廿三名 |
- 午後二時十五分試験済夫ヨリ直ニ木原礫殿御帰序ニ相成申候間行余舎ニ於テ略。

半七郎は、郷土の国学者須山の渡辺眞文に国学を学びその影響を受けたものであろうか、神官としても活躍した。当主匡秀氏は孫にあたるが「祖父は銀行家であり几帳面で問題点を整理し判断を下すことが速かった。当時、下男・下女が幾人もいたがトラブルがおきてもおだやかに聞いて解決した。日ごろは大きな声の持ち主で内心は雷が落ちるのではないかと思った。ヨウカンには角があるので危いよとこどもたちに言ったり、私が肩をたたいても「まだ弱いぞ」と言われたことなど数々の笑い話を残している。

一見、豪放磊落に見えても緻密で柔軟な人物であったが匡秀氏は、祖父を「腹飲ん屋」であったと表現される。半七郎は俳号を忠匡と称し、当時連水、九成などの俳人と親交があった。半七郎は大正9年、90歳で亡くなった。



湯山半七郎日記(湯山區秀氏蔵)

歴史の 散歩道

勝田三平

芹沢充寛

①7



藩政時代須山村は御師の村であった。御師とは神職のことであるが富士信仰の先達、案内人であった。

須山口富士登山道は、富士宮、富士吉田とともに公認の登山道で須山浅間神社はその玄関にあった。

寛政12年（庚申）5380人の登山者の記録が残されているが、歩いた時代¹に驚くほどの人数である。

この御師の村が衰退したのは宝永4年（1707）の宝永の大爆発により登山道が火山灰に埋もれたからである。一山村の須山は、水田はなく、わずかな畑作、山からの天然資源や炭焼きが生活の基礎であった。

三平は文政6年（1823）須山村名主勝間田家に生まれた。

三平は、幕末名主を勤めているが明治維新後も村の指導者として大きな役割をはたしている。

新政府は、国家財政確立のため、地租改正を進めるため明治9年官民有区分事業を行った。その際三平は、愛鷹山共有林野1700町歩を民有地であることを主張し認めさせた。三平は林野の事情に精しいので新政府の役人に對して攻妙な案内をして村に有利な結果をもたらしたという逸話を残している。

また、「三平横道」と呼ぶ農道は、十里木と勢子辻の間から御殿場に至るものだが三平が設けたものである。

良質な木炭で三島・沼津方面に知られる炭焼き、さらに茶の栽培、養蚕などの導入は三平が積極的に進めたものである。

三平は、常に村人の生活を知り、実利を考えた先見性をもった事業を率先して実践してきた点に大きな足跡を残している。三平は明治27年に亡くなった。国有地払下げの碑は昭和30年、頼朝の井戸の近くバナの原生林の一角に村の人々の手で建てられた。碑文を紹介しよう。

「土地保有の碑……十里木部落ハ富士足高ノ山間ニ狭マリ官有林ニ圍繞セラレ住民生活ノ安困ヲ期スル能ハス……」
戸長勝田三平の業績でもある。

資料提供 渡辺徳逸氏

富士山資料館 裾野の文化財



頼朝の井戸の森

歴史の 散歩道

詩人大岡信
と裾野

芹沢充寛

18



でもあった。詩への架橋。に出てくる
斉藤健一はクラスが一緒であったので、
大岡信らの同人グループに参加してい
たことはガリ版刷りの同人誌を買わせ
られたので覚えている。

大岡信について裾野の同級生は「頭
は切れるし、友人は大事にする、また
意外に大膽であった」と述べている。

「折々のうた」では、時空を超えて
残ることは、いのちとの交換で費やさ
れることは……言葉を厳密に実到大切
にされている。

さて、大岡信と裾野との結びつきは
威勢のよい山線の同級生を通してであ
り、行軍で歩いたことであろう。

それに「サファリ」に対してすばら
しい詩を発表されている。その一部を
紹介しよう。

ほんとのライオン

冬に入る日、富士の裾野の

すすきは陽ざしを東西に渡し……略……

軍の火砲富士にこだまし、

樹林の伐採いまたけなは。

(七草とりならおほえてるだろ)

(ん 裾野の夜行行軍? あの時や

中学一年すら) ……略……

ライオンはアフリカにみるライオン

がほんと。

……略……

(注)敬称略 大岡信詩集「詩への架橋」

「折々のうた」を朝日新聞に連載し
ている大岡信は三島市の出身である。
詩人・作家・文芸評論家・大学教授
……第一線ですばらしい活躍をされて
いる。

「詩への架橋」の中に「北は裾野、
御殿場、西は原、南は静岡、西浦、ま
たは伊豆の山間部といったひろがり；
……」当時沼津中学の生徒は東東部の各
地から集まってきた。

御殿場線は山線と呼ばれてあまり洗
練されていないがたくましい学生がそ
ろっていたようだ。敗戦を迎えたのは
大岡信が旧制中学3年、筆者は2年の
夏であった。当時は食べものもなく、
学校は空襲で焼失、沼津にはバラック
作りのヤミ市がたっていた。

そのような時代であったが学校には
雨後の竹の子のように沢山の文化サー
クルがつくられて自由を謳歌した時代



大岡信詩集より

歴史の散歩道

芹沢充寛

⑬

土屋倫啓

土屋倫啓は、明治8年裾野市深良に生まれ、倫啓と呼ばれてきた。

明治維新後の法曹界は、明治9年に代言人規則、同26年に弁護士法が制定された。当時、代言人、弁護士の大半が旧士族に占められていた。

倫啓は、早くから上京し、同35年に明治法律専門学校（現明大法学部）を卒業、大正3年に試験（司法試験）をパスし弁護士の道に進んだ。

「駿東郡泉村騒擾事件」は、大正5年箱根西麓共有林野惣千四百町歩をめぐる部落有林野統一政策の反対運動から発生した刑事事件である。この時、事件の弁護を手がけたのが地元出身土屋倫啓、沼津の一杉藤吉弁護士らであった。

大正6年東京控訴院（現高裁）荻淵裁判長に提出した「弁護之要旨」は、倫啓の名でまとめられ、事件の背景、



経過、村民の生活と主張そして証拠論、情状、社会的影響、科刑論を展開し、理解と寛容な判断を求めており、倫啓の視野の広さを示し情熱をかたむけていたことがわかる。

また倫啓は、一つのエピソードを残している。大正デモクラシーを反映して、平民宰相といわれた原敬が総理大臣に就任した時帝国議会の第一声の演説の原稿を安田善次郎に依頼した。善次郎は安田財閥の創立者であるがその草稿をさらに倫啓に依頼した。倫啓は、善次郎の筆頭顧問弁護士であったからである。

原敬の国会での演説は、与党の政友会をはじめ憲政会；などから万場の拍手をあげたと言われ、後日、原敬が善次郎を訪ねた際善次郎は倫啓をひき合わせたと伝えている。

倫啓は、当時の経済、政治の動向に精通し、大正デモクラシーにふさわしい思想の持主で先の演説にはそれが反映したものであろう。倫啓は裾野の孫や甥にモダンな洋服などを贈っており、厳格な反面優しさを持っていたようだ。昭和7年、59歳で亡くなった。

献資料提供 芹沢充寛



土屋倫啓氏の「弁護の要旨」

歴史の 歩道

鈴木忠治郎翁と
育英事業

芹沢充寛

②0



翁の友人である後藤新平は、満鉄総裁、内務大臣、関東大震災後の東京復興計画を進めた政治家であったが翁とは、アジア諸国への視点、食糧問題、バイオニア的な生き方に共感を覚えたものであろう。

また家族と一緒に温泉に出かけた時でも丁定規を手にし車中ではたえず推考していたと言う。頑固一徹、繊細、厳しさと人情の厚さ……个性的でバイタリティーにあふれた人物であった。

翁は、昭和38年裾野町に志徳円を寄付されたがそれは郷土の若者への愛情と将来への希いを託したものである。

育英資金はすでに80人の学生が受けている。また同43年に趣旨を生かした鈴木育英図書館が設立され、市民文化の多面的な活動の拠点となっている。

翁は、同36年に紫綬褒章を受章、同39年裾野市で初めて「名誉市民」を授けられた。同39年、創意研究に生涯をかけた翁は77歳で亡くなられた。

鈿資料提供をいただいた鈴木芳子鈴木育英図書館長は、忠治郎翁の長女である。

鈴木忠治郎翁は、明治22年裾野市佐野二本松の米屋鈴木商店に生まれた。忠治郎18歳の時、米穀と生糸の家業をすでに自立しきりまわしていた。19歳の時不幸にして3年間療養生活を送ったが、この間を独学で勉強し災いの時を蓄積の時にかけたのである。その後の特徴的な活動の一部を紹介しよう。大正2年25歳の時、押麦の製造方法とその機械並びに精麦装置を発明してから実に470余件の特許実用新案を得たが、その大半は食糧関係の開発・発明であった。

同5年、国民体位の向上と二毛作を奨励耕地の立体的利用により貧農階級の救済と食糧問題の解決のため「食糧評論」を創刊するなど食糧政策に関する論文などを全国的に発表、普及した。昭和7年に鈴木糧食研究所を創業、研究の成果を事業活動に発展させた。



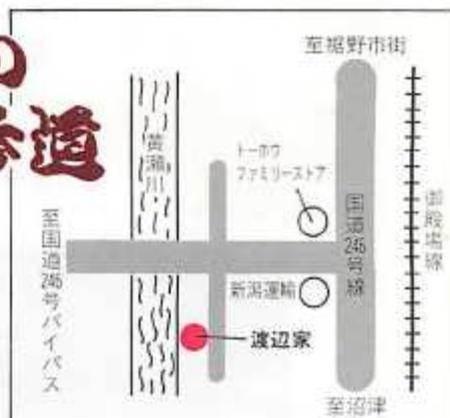
後藤新平(左)と鈴木忠治郎(右)
食糧研究所静岡工場を視察する(大正年間)

歴史の散歩道

渡辺慎一翁と 回想の記

芹沢充寛

②1



や論理的な文で敬服のほかはない。回想の記」は裾野市にとり貴重な資料であるが、明治から大正、昭和にかけての翁自身の見聞記で当地方の人々の生活を温かい眼で、社会の動きを正確に記録しているからだ。

また「静岡県下の天然記念物を巡る」では、当時の文化財保護の視点を示した記録、随筆である。

「回想の記」の一部を紹介しよう。

「佐野から沼津迄三里と申します。

…だけの道を毎日徒歩で通学したものです。…野球は随分熱心にやりました。当時野球をする時の服装は…白の半袖襦袢と両方に二本宛黒紐のある白小舎の半ズボンを用い…足袋蹠足で脚絆をつけたものです。吾が東海丸はスルスルと岸を放れました。…吾々沼中健児のオール挽き鯨かに、朝の狩野川を渡るが如く下りゆく中…その内に「鯨だー」と言う叫びに眼をさますと成程二、三百米先方に十二、三頭の鯨が盛に汐を吹きながら遊泳しており…情景が細やかでなんととも楽しい記録である。

翁は、昭和55年、93歳で亡くなられた。

資料提供 渡辺俊一氏

翁は、地域に根ざし自作農創設、声ノ湖水利組合、小泉村議、裾野町議などを歴任し永年にわたり地方自治を支える役割を果たしてきた。

翁が卒直に意見を述べたり、物事を自由な眼で見ていることは、その著書「回想の記」（昭和15年）によく描かれている。また柔軟な思考力には筆者がお願いした「十分所の記」などほとども90歳の高齢とは思えないほどの筆勢



渡辺慎一翁著の2冊

歴史の 教歩道

勝又量平と 文明開化 芹沢充寛

(22)



勝又量平は、裾野市茶畑滝頭で天保年間に生まれた。勝又家は不動尊境内に建てられた東山山論猷彰碑の名主勝又家の一族と伝える。

量平は家業であった農業に従事するかたから北越出身の古愚堂先生について詩作や隷書を学び、「醒民」と号した。明治維新により、同6年学制が施行され、同7、8年に小学校が設立された際、駿東郡下の小学校では正規の資格はないが元寺小屋の師匠や地元で学問に素養のある人材が教員に採用された。量平はそうしたなかの一人であり学校教育に情熱を注いだのも4年程で、40歳の時眼病のため盲目となってしまった。

そこで量平は、山形出身の佐々木泰善から針術を習得し、針の施療を行い生計をたてたのである。

明治維新は、西洋の文明開化をもた

らしたがキリスト教の伝導も新しい精神的な息吹きであった。旧幕臣たちのなかにはキリスト教の人道主義に共鳴した者もいるが当地方の代表的な人物が江原素六であった。

当時は耶蘇教と呼ばれていたがロシア正教会の伝導が三島駅などで活発に行われていた。イイススハリストスとも呼ばれてロシアの大地に定着したキリスト教であったが量平の心に深くひびくものがあったであろう。当時の日本は偏見に満ちた時代であったが、量平は日本人伝教者大越氏の啓蒙をうけてロシア国アラミイ宣教師によってパプエルトという受洗名をうけたのである。

量平の闇の世界に光明を灯したのはロシア正教であったがどのような境遇におかれても自らの意思で積極的な生き方をする量平という人物に魅かれるものを感じたのである。

墓碑から、「醒民」の作を紹介しよう。字き年はいく経ぬるとも大丈夫の苦せぬ・・身を備えはや

量平は、同26年、57歳で亡くなった。

協力者 勝又二郎氏、勝又治男氏



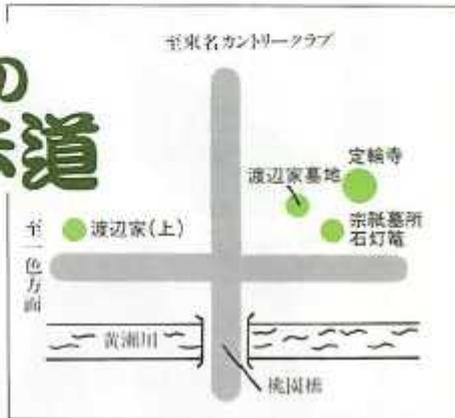
勝又量平墓碑

歴史の散歩道

渡辺虎杖と文化の土壌

芹沢充寛

24



卯の花をしかからざるかはりなり
富沢 渡辺虎杖
盆の月香の煙にやとりけり
茶畑 柏木官里
寛政4年(1793)に建立された
ものである。

俳諧という共通の世界だけではなく
人間的に信頼し交流を深めていた記録
が渡辺家に保存されている。

六花庵を継ぐ官鼠の下に虎杖、官里
というすぐれた門人が出て、さらに虎
杖の後継者に渡辺嘉平俳号を吾嶋、官
里の後継者に柏木甚蔵俳号を著圃と称
し当地方の俳諧文芸を継承、発展させ
る役割を果たしたものである。

虎杖が単に村の支配の指導者、風流
人の俳人ではないことは句集などの記
録を通しての世民性にみることができ
郷土の文化は、突然創られたもので
はなく、生みだす土壌が必要なのであ
る。渡辺家の墓所は定輪寺内にあるが
虎杖の墓石には次の通り刻まれている。
虎杖は文化9年(1812)77歳で
没したが后世の句

世に残す暑も置て 野の涼し
【参考資料】

郷野の生んだ俳人渡辺虎杖
村田陸太郎氏

渡辺家資料 渡辺武彦氏
福野市史資料目録 牧野 隼氏

近世の郷土の代表的文化と言えは俳
諧である。俳諧が盛んになった一つに
は宗祇の墓所・句碑が保存されてきた
その影響もあろう。

また芭蕉の高弟風雪が駿河に地方の
俳諧宗匠を育てたこともあろう。

郷土の俳人渡辺虎杖は、本名を嘉六
郎、字名を知照と称した。

享保20年(1735)裾野市富沢渡
辺家(上)に生まれた。渡辺家は中世
から続いた家柄と伝え、名主を勤めて
いるが村の支配だけではなく当地方の
俳諧の指導者でもあった。

桃園定輪寺境内にある宗祇墓所前の
石灯笼の棹石に宗祇法師三百年祭の献
句が刻まれている。

それには嵐雪四世六花庵官鼠、茶畑
柏木官里、富沢渡辺虎杖の句がある。

三百と世ふりし文見る月をかし

嵐雪四世六花庵官鼠



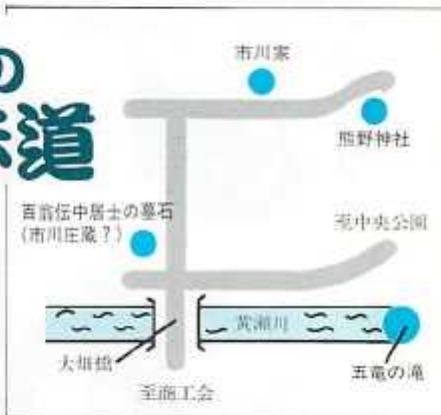
宗祇墓所前の石灯笼

歴史の散歩道

市川庄蔵と 宗教音楽

芹沢充寛

②5



滝のある環境には独特な文化がある。五竜の滝は市民に親しまれているがかつて難滝・雄滝、佐野溷園と呼ばれていた。

滝の東側には水神が祀られて、昔は沼津の漁師が古い罾をたづさえ漁の安全と大漁の祈願のため上がってきた。

滝の水音にむかって、文化、文政年間には尺八を吹奏した虚無僧がいた。

旧大畑村の出、市川庄蔵こと虚無僧名を里榎と称した。

虚無僧は普化宗という禪宗の一派、で、その特色はお経を尺八で奏でる。

尺八を吹くには免許が必要であり、武家や村方三役などの特権的な者に与えられた。

明頭来明頭打 暗頭来暗頭打

四方八面来施風打虚空来連架打

宗旨はこの一句にあり、尺八を吹奏しながら托鉢行脚を行った。

庄蔵は、文化14年(1817)免許証を伊豆滝源寺から得てから9年間にわたる記録を残している。

庄蔵は、大畑村の名主、山論などの調停をつとめ、村の指導者としてかなりの力量をもっていた人物と思われる。尺八の音色に魅かれたのか、宗旨の一句に感ずることがあったのか知る由もないが名主を退いてからは修行に励んだことだろう。

伊豆滝源寺の「旭滝」を前に「滝落の曲」がつくられた。自然と一体化した悟りと感動の境地を表現した名曲であるという。

尺八の澄みきった音色、哀愁にみちた素朴な旋律、人の胸中に迫りくるものがあつたであろう。

竹名里榎は、五竜の滝を背景に幾度か滝落の曲を吹奏したにちがいない。

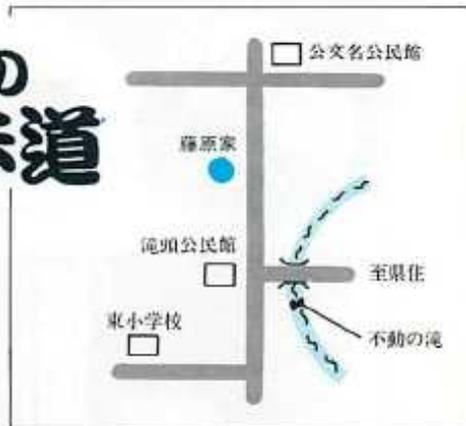
伝統的、宗教的な楽器による音楽は庄蔵の死と共に失われたと思われる。

庄蔵が滝源寺あてに出した誓約書には「……一、御伝授の曲の外吹奏しません。一、私一代の外子孫へ譲ることはしません。……」と書いてあった。

資料提供 市川善也様、市川義朗様



滝源寺に出した誓約書



歴史の散歩道

藤原重治翁と
今日の裾野

芹沢充寛 ②6

藤原重治翁は、明治11年公文名に生まれた。泉村村長、初代裾野町長などを務め郷土の発展に尽力された。その足跡の中から2、3紹介したい。

議第一号 市町の合併について
駿東郡裾野町を廃しその全部の区域を三島市に編入……することを静岡県知事に申請するものとする。

昭和三十一年二月二十三日

裾野町議会議員 十四名の提案

もし、三島市との合併が実現していたならば今日の裾野市の様相はかなり異なっただであらう。三島市から見れば、後背地の裾野は、土地、水資源、交通、労働力など……立地は大きな魅力として映っていたにちがいない。

合併には圧倒的多数の議員が賛成する状況下で藤原町長は「裾野町の将来に利益とならない」として少数派議員と共に合併阻止にねばり強い対応をし

た。全国で初めてのケース「地方自治法第178条?による議会解散」を断行、事の重大性を町民に訴える中で阻止したのである。これは単純多数決の賛を問うもので裾野市の議会史のうえでも特筆されるべき事件と思われる。

翁は、大正5年泉村部落有林野統一(箱根共有林野)をめぐる村議会では7対3の少数派に属した。騒擾事件の発生に伴い陳情書や調停案の作成などに奔走している。

翁が昭和10年代泉村村長の時、「ハコネ用水の話」の作者、タカクラテル氏が資料収集のため見えた。当時は、日本共産党員と会うことは勇気が必要とする時代であった。自宅でお茶を共に飲みながら、用水のことなど話をしたが「見識のある人物であった」と印象を語っていた。

翁は、頭脳明せきであり独力で法律、行政、郷土史に精通したのである。

筋を通した気骨の持主の反面、政治は人間自身が動かしていくものという合理主義的な哲学を持っていたように思われる。翁は昭和45年満92歳で亡くなられた。

資料提供 藤原瑞穂様 芹沢充寛

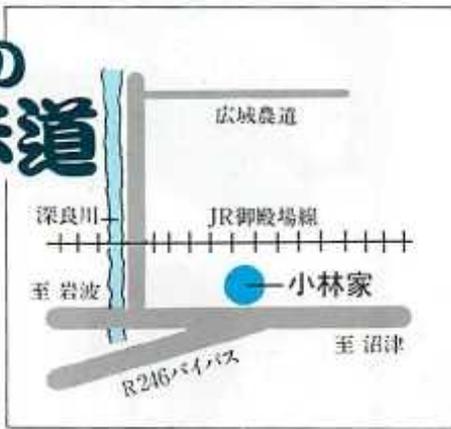
氏名	生年	没年	備考
藤原重治	1876	1945	泉村村長、初代裾野町長
藤原瑞穂	1910	1990	資料提供者
芹沢充寛	1930	2020	記事執筆者
公文名	1876	1945	公文名公民館
滝頭	1876	1945	滝頭公民館
東	1876	1945	東小学校
不動の滝	1876	1945	不動の滝
至県住	1876	1945	至県住

裾野町長名の資料
(昭和31年3月10日)

歴史の散歩道

小林隼深良村長
と給水事業
芹沢充寛

(27)



たる。また、大蔵省の認可も得るなど財源の確保に努めている。

工事概要は、富士岡村神山地先を水源とした湧水地は湧水期でも減水することのない最適の地である。

そこから久保川左岸に沿って岩波の配水地まで680間(1225m)送水し、さらに各戸に配水したのである。

水道管敷設の掘削、埋戻しに至る工法は先進的な技術を駆使し、良質な資材を使用した。

工期は、昭和8年4月着工し同11月に完成したが、当時としてはもっとも短い工期であったようだ。

水源施設から岐水管まで公共負担とし、給水栓はメーターなしで1戸60銭、給水口1ヶ所増やすことに15銭としたのである。

これで伝染病患者の発生は皆無となり村民に計りしれない利益をもたらした。小林隼村長は、田制並山中中学を卒業、几帳面な性格、旦那と時ふのにふさわしい人柄であったと伝える。

また地方自治の基本的な施策、給水、公衆衛生に示した決断力と先駆的な事業には敬服のほかはない。

(資料)小林慶一様 小林秀一様

昭和6年当時、深良村は戸数16、人口2318人の山村であった。

賜チフスなど大正11年から昭和6年までの10年間に伝染病患者は42人の発生をみた。

深良地区は、岩盤などで鑿井は困難であり従って河川の流水が飲料水に使われ、ことに田植え時期になると飲料水には適さない流域が多く見られた。

そのため村民は伝染病に対しては絶えず不安のうちにおかれた。当時の小林村長は、村民の生命にかかわる公衆衛生事業、村民の財産を守る消火栓の設置などを検討した。その状況を根本的に解決するには「深良村上水道敷設の事施行の件」のほかはないとして村議会に提出し、多数で議決したのは昭和7年のことであった。

事業計画をみると総工費5万1000円。これは当時の村の子算の倍にあ



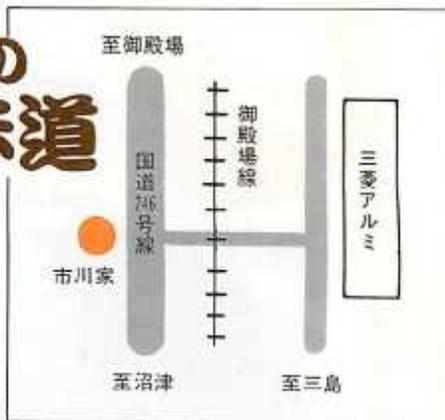
小林隼翁銅像(深良コミセン前)

歴史の散歩道

市川玄吾と半世紀にわたる記録

芹沢充寛

(28)



ここでは、年輩の多くの者と共通した体験と思想を持っていた身近な人物、堰原の市川玄吾を紹介しよう。

「帝国在郷軍人会小泉村分会歴史」という半世紀にわたる記録が残されている。明治37年日露戦争の際組織され、昭和20年8月太平洋戦争敗戦とともに消滅した会の記録である。

天皇の聖徳を称え、軍人精神の高揚をうたいあげた活動記録である。

大正12年の大震災では「9月1日より10日迄大震災害後ニ於ケル火・盗難防止、不逞鮮人襲来ニ対スル警備及避難者救援等ノ任ニ就ク 9月6日堀野停車場構内ニ於テ列車転覆シタルニ由リ……翌7日午前1時迄傷者ノ救護死者ノ発掘……」と記している。

昭和16年12月分会長であった玄吾は、太平洋戦争開戦に際し決意を新たにし、家族一人ひとりに家訓・遺書とも言う

べき言葉を残している。「妻に告ぐ 名譽ある帝国軍人の妻として左記事項を厳守し世人に後指をささるる如き事なく皇恩の篤志に応へ奉る……」など類聖的な言葉である。

昭和20年8月23日の記録は、敗戦の衝撃で「……記録ヲ隠匿ニ意ヲ決シ後日大日本立チ上リタルトキハ聖旨ヲ奉戴……後者ニ望ム」で締めくくりをしているが、玄吾は最も忠実な忠君愛国思想の持ち主であったと言えよう。

明治維新から80年間にわたる教育の効果でもあった。玄吾は「農事日記」を数冊残しているが、農事の事柄を淡々と記しているだけで、そこには農民としての素朴な姿があるだけである。

敗戦後の1年間、何も手がかず心の空白をつくった玄吾は、100度の価値転換をどのようにつけて止めたのだろうか。土地家屋調査士の前身である測量技師として活躍し、さらに地域での公的諸活動に生きがいを見つけたかのように積極的に参加してきた。

戦後の民主主義の進展は、農村では農地解放がより自由な気分を醸成した。玄吾は「……如何ナル苦難ニモ忍従シ三千年來管テ見ザル国辱ヲ雪ガンコトヲ誓フ」という記録を再び見ることなく、昭和54年満77歳で亡くなった。

(註)敬称略 資料提供 市川せつ様

高小職 相掛 小泉 玄吾 史文 歴史 啓蒙 昭和 12 年 9 月 1 日 大震災 害後 火 盗難 防止 不逞 鮮人 襲来 対スル 警備 及 避難 者 救援 等 ノ 任 ニ 就 ク 9 月 6 日 堀野 停車場 構内 ニ 於テ 列車 転覆 シタル ニ 由リ …… 翌 7 日 午前 1 時 迄 傷者 ノ 救護 死者 ノ 発掘 ……

市川玄吾 遺書 昭和 16 年 12 月 分会長 として 太平洋 戦争 開戦 に 際し 決意 を 新た に し 家族 一人 ひとりに 家訓 ・ 遺書 と も 言う

歴史の散歩道

永続橋を架けた人々

芹沢充寛

②9



裾野は水辺の街である。どこを歩いても小川や水路が網の目のように張りめぐらされ流れている。

この小川や水路の上の空間の広がりは、人々の心をなごませている。

私は、昭和25年ころ、黄瀬川溪谷に架けられたアーチ型の石橋を幾度か渡ったことを覚えている。

その橋は「水続橋」と称して、深良と御宿を結ぶ貴重な道であった。

橋は明治43年10月に着工同12月に完成、幅10尺、長さ45尺の規模、石を用いたアーチ型の設計、最高の技術を駆使して実現したものである。

当時、地元の人はモダンな橋を見て、目をみはったと伝えている。

橋はモダンな形であるにもかかわらず、あの黄瀬川の清流と落岩流の景観に溶け込んで50数年にわたり、親しまれ使用されてきた。碑文には「…水汎濫

交通杜絶行旅病…国運発展文頓禁…」と記されている。時代の要請で演習場にも利用、昭和36年現在の橋に架けかえられた。

橋の東岸に「永続橋碑」が建てられ、表面に趣意が裏面に協力者の名が刻まれている。碑文の文字、左上の亀、欠落しているが右上には鶴が刻まれていたと思われる、実に行き届いた碑である。

最近の護岸工事は、防災ということでも機能的な面ばかりが強調された工法である。そのため、景観を含めた設計、工法は後まわしとなり、雨水を早く集めいかに早く海に流すか——が現代の工法のようにだ。

この橋を実現したのは村の指導者、深良の小林理三郎、小林甚五郎、松井謙保、井上伴学らと村議会、深良の人々の協力によって作られたものだ。

中でも両小林翁は、若い時代から勉学を重ね広い視野をもっていたと言われているが、モダンなセンス、の土壌が十分にあったのである。

先人の感性や個性を発揮した文化遺産に学ぶべきではなからうか。

資料 水続橋碑資料 大庭景申先生



永続橋碑

歴史の散歩道

横山健吾翁と
愛鷹山組合
芹沢充寛

30



横山健吾翁は、安政5年旧千福村の愛鷹牧士横山瑞平の長男に生まれた。牧士とは、ここでは幕府が開設した愛鷹山野馬の牧場の管理者で、山麓の村の有力者になった。

横山家には、中世文書北条氏直が伝わるが、健吾翁は、幼時から修善寺芝山学舎で漢学を学び、後に日本歌道会の会員となった。

明治8年湯山半七郎らの行余舎の開校に際し、教員として参加した。

同15年千福村村会議員を初めに御宿村外13ヵ村、富岡・須山村村長、郡会議員など地方政治を57年間にわたり担い、昭和13年自治制発布50周年記念に表彰されている。

愛鷹山は、千福・葛山両村の人々には、入会山として生活の基盤であった。

明治7年官民有区分の際、愛鷹山は官林に編入されたため、同8年から民有

引戻運動が独自に行われた。同24年に至り江原素六らの運動と提携し、同32年に払下げが実現し民有地となった。翁が「愛鷹山民有請願代脳録」に記すとおり、明治32年1月4日「愛鷹山払下之内……境界下調トシテ千福葛山両字惣代、左記ノ人名登山シ午後5時8分境界ヲ経テ本洞ニ下リ帰村ス……」等愛鷹山に入り境界の確認、事業計画の資料を得るなど、大変な努力をはらっていることがわかる。

深良用水の水利権をめぐる逆川事件では、箱根湖用水掛深良村外6ヶ村水利組合の7ヵ村村長原告人の一人として活躍し、大審院で逆転勝訴をかちとり、水利権の擁護に努めた。

翁が舅にあたる龜寿さんは、今年満96歳を迎えたが健在で、なお記憶力が衰えていない。「理非曲折を正す極めて凡帳面な性格で、俗に言う頑固者であったがもう一面では思いやりのある人柄であった。総明な顔立ち余人をよせつけない威厳をもっていた」と印象を語っていた。翁は昭和17年86歳で亡くなった。自治制発布記念時の歌

年久に思ひくだきしまごころに
君の恵みのつゆぞかかれる

参考資料

- 1 横山龜寿様・横山正美様資料提供
- 2 横山家文書・裾野市教委
- 3 第三号代脳録・大庭景申解説
- 4 愛鷹山組合沿革史

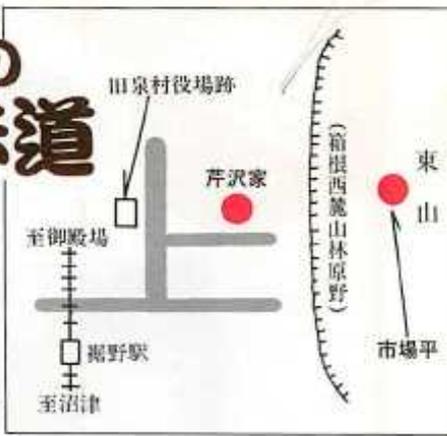


横山健吾作

歴史の散歩道

東山(箱根山)と
芹沢又一郎
芹沢充寛

③1



也……」さらに「……近時箱根竹ヲ以テ
巻煙草用パイプ(团扇ノ原料)ヲ製スル
ニ至リ海外輸出品トシテ年額十数万円
裾野駅取扱貨物中ノ主位ヲ占メ……該
林野は村民共同恒産ノ親ヲ呈シタ」の
である。又一郎は「明治22年頃不作の際
共有山市場平7町歩の開墾を始めとし
て……60町歩の……追加開墾を為し……」
農家経済の安定を図った。

又一郎は、須山小学校の教員を勤め
ていた。芹沢家は神道にかわっている
が、須山の国学を学んだ渡辺家とは、
親交があつたようだ。深良用水木門を
築造した宮大工橘吉蔵の手紙には……ヨ
ロッパのことを話す者などいない時
に、ドイツの大学の話をしていた……
と書いてある。

同18年東山入会訴訟の際、山担当人
として資料を提出するなど、測量・図
面を作製していた。古老は「知恵者」と
呼んでいたと伝えている。

墓誌には「……共有林野ノ官有地ノ
処分ニ反対シ……民有地タルノ決定ヲ
得タリ後年開墾ニ着手泉村大宝庫ノ基
礎ヲ形成シタリ」と刻まれている。

又一郎は同27年亡くなった。

【資料】

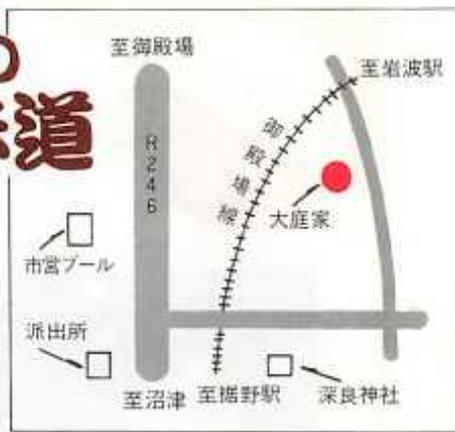
芹沢家資料 芹沢充寛蔵

橘 吉蔵氏手紙ほか

柿木家資料目録 裾野市教委

芹沢又一郎は、幕末に茶畑村名主芹
沢庄左衛門の子として生まれた。
明治新政府は、明治9年近代国家の
財政確立のため、地租改正の前提とな
る土地の官民有区分事業を行った。
この時、東山(箱根西側山林原野)1
326町歩(茶畑・久根・公文名・稲
荷・麦塚・平松各村の共有林野)は、官
有地の処分をうけたので、又一郎が戸
長らの中心となり民有引戻を進めた。
「官民区分之儀ニ付願」は、又一郎が
まとめているが、藩政時代の山税など
山林原野を使用してきた証拠を添えて、
綿密な論で民有地であることを主張し、
同13年静岡県令大迫貞清により民有地
に決定された。大正5年の資料では
「……村民ノ依テ生命ヲ託スル所以ナ
リ……田畑三百町歩ノ肥料トナシ薪炭
ヲ採リテハ自家ノ用ニ供シ……村民此
山ヲ離レテ一日其ノ生ヲ保ツ能ハサル





歴史の散歩道

現代の寺小屋
師匠 景申翁

芹沢充寛

③2

大庭景申翁は、私たちは景申先生と呼び、敬い親んでいる。

翁は裾野市深良、教育者大庭寛の長男に生まれ、東京豊島師範（現学芸大学）を卒業、教育一筋に情熱をかまわけてこられた。

立川の小学校、落ちこぼれ組を担当したのが教師のスタート。作文と図画で子どもたちが自己表現できるよう指導、自主性・自覚性を伸ばしたのである。

子どもの個性を生かす、それは点をつけられないがそれが教育である。

戦前戦後を通して、そうした姿勢は貫いてきたと言われる。

郷土の小学校・中学校校長を退職してからは、「裾野の文化財」や「横山家文書目録」など文化財保護、市誌編集準備に地道に取り組んでこられた。

かり版刷りの手づくりの。本も20

冊余を数えるが、自然に人々に対する温もりが伝わってくる作品である。

旧制沼津中学時代は、丁度大正デモクラシーの高揚期で、マラソンの選手、ボート部の漕ぎ手、同人サークルをつくり自由に活躍した。先輩に歌人大岡博、同級に作家の井上靖、詩人の金井広など多彩な文学少年の集いがあった。井上先生、景申先生も浪人をされたが、その時は互いに受験のことで手紙のやりとりをしていた。私信のため紹介できないが、井上君は友人を大事にしたが自分の個性も大事にしていたように思う。と、満80歳を迎えて文学少年時代を回顧し、永く続く友情を楽しそうに語っていた。

最近、「百花だより」という野の草花と童話が本になった。ハガキで子どもや孫にあてた作品集である。

これには先生の優しき、豊かな文才がいかに表現されている。

この原画展は昨年7月催され、80人の市民に観賞をいただき好評であった。季節感、土の香り、子どもの眼、そこには忘れかけた自然に対する眼、新鮮な感情の流れなど教育の原点が示され、さわやかな感動があった。

現代の寺小屋師匠の風格、生涯教育者の姿を感じるのである。



「百花だより」から



歴史の散歩道

寺小屋師匠
柳沢文溪
芹沢充寛 ③③

柳沢文溪は、幕末から明治にかけて、旧深良村、久根村など当地方の子弟に寺小屋師匠として当時の教育に大きな影響を与えた。

文溪は、江戸旗本柳沢家に文化12年に生まれた。事情は不明だが江戸を離れ、家族を捨てて信仰と手習師匠として各地を点々とし、明治17年深良の地で亡くなった。

門弟の一人、勝又平七の孫剛氏は「祖父は、文溪先生は耳が不自由で、病がもともとと言うより、賢い子であったため継母から疎んぜられ……ある日継母の手で耳に熱湯を注がれた」と伝える。

真偽はともかく、旗本の没落、家庭の不幸・不具の悲哀……そこに日蓮宗に入っていた背景があると思われる。明治維新という変動の時代を、文溪は旗本の子息・宗教人として、どのように見ていたのだろうか。

文溪の筆写した教材が数多く残されているが、御家流の見事な筆跡である。教材を見るかぎり、時代に対応した内容が希薄のように思われるのだが、深良上丹に帰正庵という庵があるが、柳沢文溪先生の墓と文溪師墓標が建てられている。

これは、明治18年小林文信ら門人一同が、文溪師匠の薫陶をしのび建てたものである。「内人前後八百余名」と刻み、その中から新しい時代の村の指導者が大勢育っていった。

教材の奥書に「東都居士」「江戸の産」「江戸浪士」などと記しているが、望郷の想いがこめられている。

教材の「松蔭思鏡詩善鑿」には、「書残す筆に心のこもれかし」として後にも語るほど。

後世に残ることを希う心情がこめられている。辞世の句として駿東教育史に「院を嗣ぐ弟子も兎もなき老の身の何欲かりてなにと勉めむ」

文溪師匠の老境の思いがひしひしと追ってくるようだ。

参考資料

- 1 文溪・節齋・善谷
- 2 駿東教育史
- 3 勝又 昭氏資料



柳沢文溪先生の碑(ふるさと探訪から)



歴史の散歩道

獄中記と服部直

芹沢充寛

34

昭和20年8月、太平洋戦争は日本の敗戦によって終わった。

米・英・ソ・蒙など連合国により、日本の戦争責任を追求する、いわゆる東京裁判などが行われた。

「平和に対する罪、人道に対する罪」など3つの罪条が挙げられた。

服部直は、敗戦とともにモロタイ収容所、メナド刑務所に拘留されたが、豪国は憲兵の住民殴打、拷問事件の共犯者とした。直様は民間人として日本のトモホン憲兵隊より囑託通訳を依頼された単なる通訳であったのである。

当時、現地は反日感情がきびしく、弁護の証言を求めるときもできず、孤立無縁のなかで裁判は進行していった。直様は、無論自己の無実を主張しているが、旧日本軍の残虐行為に直接関わっていないまでも、道義的責任を求めめる法廷では無罪は困難であった。自己のお

かれた状況を理解し、真実を主張し、内面的苦悩を経ながら自己に迫る運命を正面から見すえ、澄み切った境地に到達している。

敗戦、異国、絶望、孤独、無実……心からの叫びを、恩師に、母に、友人にそして、「我輩は油虫である」に自己を冷静にみた作品を残している。

鉛筆・紙がない刑務所でよく丹念に書きとめた、それが「獄中記」である。友人の鈴木強氏は「手記の磨滅した字体を判読しながら、その心情を思うとき涙がとまらなかった」と語っている。

直様は助命嘆願書も却下され、同23年4月バタビヤ刑務所にて処刑された。

獄中記から「御母上様」あての一部（それに比すれば直は真の幸福者……死刑求刑以来九ヶ月判決以来五ヶ月の長期間に亘り恐怖の荒波にもまれ……幼子の如き心となり何物をも恐れぬ精神を鍛へ自己を掴みました。直は何等心残りはありません。笑っていきます。そして靈魂はお母さんの胸に帰ります」行年23歳。戦後40余年、平和を創るのは私たち自身ではなからうか。

参考資料

- 服部芳太郎様（直様の実兄）
- 鈴木強様 解説・編集「獄中記」
- 東京裁判（中公文庫）



歴史の散歩道

太平洋戦争と2人の“軍神”

芹沢充寛 ③5



昭和19年、飛行編隊から離れた1機が福野の上空を旋回し去っていった。同年10月、第1次神風特攻隊大和隊

がレイテ湾の敵艦へ壮烈な体当たりを敢行し、戦死を遂げたことがラジオ、新聞で報道され、その中に勝又富作の名があり、身が引き締まる思いで聞いた。実に20歳であった。

富作は、旧制沼中から海軍予科練に進んだ。義姉は「山が好きな行動的で思いやりのある子であった」と語る。同窓生は「硬派の先輩が講堂で堂々とした態度で演説をしたことを覚えている」と伝えている。

同20年5月、第7次神風特攻隊神雷隊は勝又武彦を指揮官として、沖縄で激烈な体当たりを敢行したことが報道された。実兄は「武彦は旧制御殿場中学から浜松師範学校へ進んだ。柔剣術では、静岡、愛知、岐阜3県で優勝、

明治神宮大会へ代表で出場し、グライダーも2級の腕前を持っていた。今里から御殿場まで自転車で通学、意志の強い弟であった。22歳で戦死した」と語っている。太平洋戦争の戦況は、日本がマリアナ海戦でも敗北し制空圏を失っていた。

特攻隊は、米国の航空母艦艦隊をたたくのが目的であり、日本の戦力ではこの非人間的とも言える方法以外に起死回生の戦術はなかった。大西中将は「日本はまさに危機である。しかもこの危機を救いうるものは……諸子のごとき純真にして気力に満ちた若い人々のみである」と訓示。それにこたえて祖国の危機を憂い、愛する者への愛情の表現として身を捨てたのだが、戦局を変えることはできなかった。

軍神も、人の子。手記、家族や友人に残した印象は極めて、人間的。である。軍神は軍国主義時代の英雄主義の象徴であった。筆者も4人の従兄が戦死している。戦後は多大な犠牲の上に出発したはずである。今日の平和と繁栄を見る時改めて憲法の平和主義をかみ締めてみる必要があると思う。

〔資料提供〕

勝又富作氏



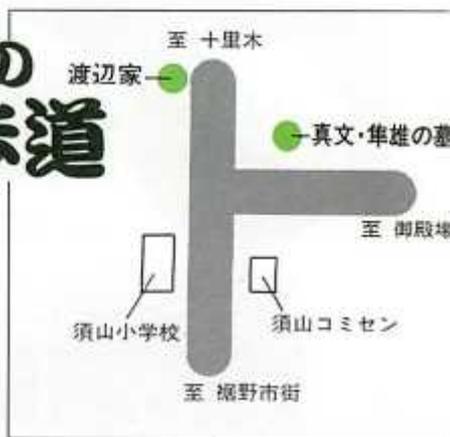
・勝又直治様（富作様実兄）
・勝又正彦様（武彦様実兄）
・特攻隊関係資料



勝又富作氏のはがき

歴史の散歩道

国学と渡辺真文・
隼雄 芹沢充寛



明治維新は裾野地方の一山村である須山村まで大きく変えた。

明治初年。鹿仏葉萩が全国的に浸透した時期に各村では、従来の家の宗教、仏教から神道へ変わった家が少なからずあった。なかでも須山村は記録によれば一村と言ってもよいほど神道となる特徴的な動きを見せている。

須山は山村とはいえ、浅間神社が在り富士信仰の御師として宗教的導者、富士山への山案内人の伝統をもつ村でもあった。幕末から明治にかけて、王政復古の思想は国学がその土台であり、須山はそれを受け入れていく土壌があったのである。須山の渡辺真文、その子隼雄は父子二代にわたる地方の国学の徒であった。

浅間神社には神官の渡辺家があるが真文は、渡辺一太夫の子で、須山村の名主勝間田惣次郎の三男であった。

同家は宝永噴火で埋もれた須山南口登山道の復活に努力し、御師の渡辺隼人の権利を取得し渡辺の姓を継いだと伝える。真文は、国学を学び、当時、国学者として著名な本居宣長の高弟、伊豆の国学の中心的な存在竹村茂雄に学びまた、交友があり、その影響を受けたものであろう。万延元年亡くなったが真文の作品を紹介しよう。

「八重山霞といふことを詠めと人の云いければうすくこく立るを見れば足柄や八重山の名は霞なりけり」

隼雄は、真文の長男に生まれた。隼雄は皇学、歌学の石川依平の門人となり勉学に励んだ。浅間神社の神官、名主、12か村の副戸長を勤め、明治25年に亡くなったが、その時の作品を紹介しよう。

「夏の夜の夏よりもけにはかなきは見はてぬ人のわかれなりけり」

変革の時代に対応する思想は国学にあり、一山村の指導者が広い視野をもっていたが、それは同時に国家神道が確立していく時期にもあつていった。国学とは契沖く本居宣長など近世の古典研究の一学派であるが明治維新の実践的な学派であった。

（資料） 渡辺一三様・渡辺徳逸様

渡辺家墓碑・東駿地誌

岳麓新聞（昭和32年）



墓碑に刻まれた和歌（須山）



歴史の散歩道

芹沢充寛 ③7
 随見雑誌と
 寺田治三郎

旧久根村に寺田治三郎が記した「随見雑誌」という記録が残されている。

治三郎は、明治前半期、旧久根村の指導者として地租改正に伴う山林原野の事業、貴信舎の学校建築、箱根山入会に関する訴訟など村民生活に大きな影響を及ぼす村の行政に参画し大きな足跡を残してきた。

「随見雑誌」は明治9年から18年までの村やこの地方の公的な動きを記録した資料である。

「駿河国三四五模範組合山林原野地位贖買明約書」は、山林原野の地価の協義が整ったことを示している。

三番模範（明治13年8月5日）

反別三千九百廿九町壹反壹畝廿貳歩

此地備六千四百七拾五円拾八銭五厘

①一町歩当り壹円六拾五銭ほど。

駿東郡第三番模範改租事務担当人は

水口伍平・勝又弥平治・松井謙治・湯

山半七郎・上杉藤三郎・土屋佐久太・

芹沢太十郎・渡辺秀敷の名が見える。明治新政府の中央からの新政策に対して地方の有力者が担当し実践していたことをうかがわせる。

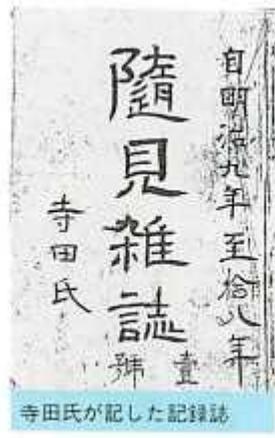
東山（箱根西麓山林原野）入会では明治19年「新並篠竹町取入会差拒解除上告」は大審院までいくが被上告人としては山本浅次郎（茶畑）寺田治三郎（久根）の両名である。答弁書などの記録を見ると東山の入会の資料を藩政時代から綿密に調査し、上告した佐野村の主張を一つ一つ丁寧に反証を挙げたこと、結局この訴訟は茶畑、久根など旧6か村の勝訴に終わった。

旧久根村の指導者寺田治三郎は、地味な存在であるが中央の政策に、村の権益を守るために誠実に対応処理している。

記録は治三郎の誠実な人柄、理性的で数字に強い人物であったことを示している。寺田家によると正義感にあふれ秘めた情熱の持ち主であったようだ。日本の近代化は、こうした地方の指導者の着実な努力によって推進されたものである。治三郎は昭和8年78歳で亡くなった。

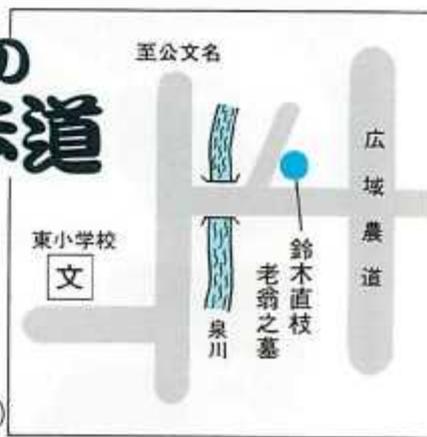
〔資料提供〕 寺田家資料

寺田つる様



歴史の散歩道

“天狗党の乱”
鈴木直枝と
芹沢充寛 ③⑧



近代国家にふさわしい教育制度は、

次第に裾野地方でも進められました。

茶畑村、麦塚村、平松新田が第17番小学潤身館を設立したのは明治6年、願生寺に学校が置かれました。

設立当時の教員に鈴木直枝がいました。直枝は新しい小学校温知館に明治9年から19年まで勤めました。

明治7年潤身館の教育になる前までは、「…開放一塾本村薫陶子弟明治7年際学制」と墓誌に刻んであります。明治20年に佐野原尋常小学校訓導、後に主席、明治41年に泉、小泉が分離独立の際に教育界から退きました。

直枝の出身について次のように伝えられています。墓誌には「…水戸藩士服部源七郎之四男也弘化三年（1846）」に生まれたと刻む。当時の水戸藩は、元治元年（1864）に藤田小四郎が筑波で挙兵し、天狗党の乱と呼ばれました。水戸藩は攘夷党という

進歩派と保守的な諸生党に二分され藩政の権力闘争が行われていました。王政復古と攘夷、幕藩体制の維持というまさに変革期の矛盾が水戸藩では深刻な対立に発展しました。保守派は幕府の応援を受けて進歩派を徹底的に弾圧し、その犠牲者は30余人に及びました。しかし、その幕府もわずか3年後に崩壊してしまいました。

直枝が18歳のころ、水戸学という国学を学び、同時に朋友が相争う悲劇を目の当たりにしたのでしょう。水戸の地を逃れて、この駿東の地、茶畑村を定住の地と決めましたが、茶畑村の旧家、柏木家を頼ったものと思われ、箱根を越せば関東平野が。水戸が望める箱根西麓の村では、直枝を受け入れて、平和で自己の学んだ国学をもって子弟の教育にあたるのができました。

新時代の教育者として、当地方の発展に情熱を注いだ直枝ですが、両親や縁者は、天狗党の乱、でどうしたのでしょうか。直枝は大正9年76歳で亡くなりました。

齢巳古稀六年 窮通之是之付蒼天
老健草境成何事 自徳功勞無可伝
〔参考資料〕 いずみ・杉山棟

鈴木家墓誌

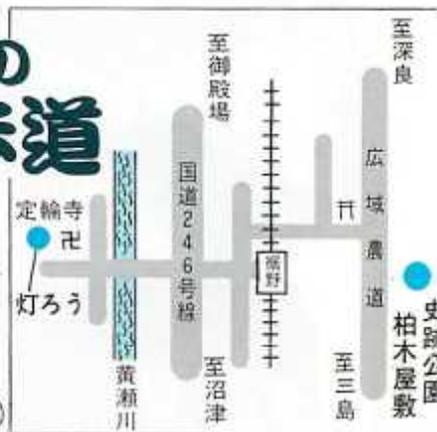


鈴木直枝老翁之墓（茶畑）

歴史の散歩道

俳人
柏木官里

芹沢充寛 ③9



桃園にある定輪寺境内に連歌の宗祇法師の墓所があります。

そこには宗祇300年忌を供養した石灯ろうが建立され、その棟石に献句が刻まれています。

三百とせふりし文見る月をかし

嵐雪四世六花庵官里

稲の花乏からさるかはりなり

富沢 波辺虎杖

盆の月香の煙にやとりけり

茶畑 柏木官里

献句したのは寛政4年(1792)、宗祇法師が箱根湯本で亡くなったのは文亀2年(1502)ですから、ちょうど290年にあたります。

富沢渡辺家、茶畑柏木家ともに中世から続く家柄です。両家には虎杖と官里がかわした書状や句集が残されています。当時、虎杖、官里は村の名主を務め、村の世俗的な話題の共通面だけではなく、地方文化を担った俳諧文芸

の指導者でもありました。当時の文化サークル、句会などを催したのです。俳聖、芭蕉の流れを汲む六花庵四世官里を宗匠とし官里、虎杖は共に門人として俳諧に精進したのです。

雨林亭官里の句は、書体に味わい深いリズムがあり、表現力が豊かで内面的深さを感じさせる作品であり、漂々とした人物のように思えるのです。雨林亭官里の俳号は、優雅な雰囲気を選わせますが、境川屋敷の深い森の主のイメージにぴったりでしょう。

柏木家は中世から続いた旧家で、古くは浅間神社の神宮でしたので葛山氏元からの書状、深良用水開削に協力した葛右衛門、山論の文治郎、俳諧の官里、茗圃など郷土に実に豊かな足跡を残しています。

かつてあつた境川屋敷は寛永年間に建築された柏木繁男氏は伝えていません。同所は史跡公園ですが精神的文化的の里として句碑などを建てて保存していきたいものです。

〔参考資料〕 柏木家・波辺家資料

裾野の文化財

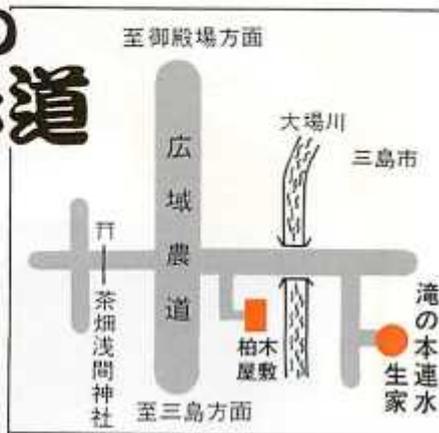


史跡公園 柏木屋敷

歴史の散歩道

俳人、滝の本連水と柏木茗圃

芹沢充寛 ④〇



明治以前は俳諧、以後は俳句と分けていますが郷土には中世の大芸術家連歌の宗祇の墓所が定輪寺にあり、漂泊の俳人芭蕉も元禄年間に訪れたという説もあります。

駿河では、芭蕉の高弟服部嵐雪のもとにすぐれた俳人が出て庶民文化として自然の天地を自由に詠ったのです。

その中に六花庵官鼠が、その後、種玉庵連山が出て門人に連水がいました。滝の本連水は勝俣猶右衛門といって伊豆佐野村の名主、慶応2年天候が不順で凶作の年、村人に倉を開放するなどの決断を下した人物です。

連山から、俳閑をうけた連水。みの形をした滝、柿の太木がある箱根西麓の山合の屋敷には、江戸の三大俳人や文人墨客の往来で連水が明治31年66歳で亡くなるまで文化のメッカとなりました。

連水の門人に茶畑柏木甚蔵こと茗圃

がおりました。茗圃は富沢渡辺家から柏木家に養子として入り、農耕に励み朴とつな人柄であったそうです。俳句は連水について学び社年になってから才能をあらわし、もともと資質に恵まれていたものでしょう。連水の俳閑をうけて、連水二世といわれ昭和6年87歳で亡くなりました。

裾野地方の神社や寺院には俳句の奉額が10数枚残されており、連水、茗圃九成などの名が記されています。

富沢渡辺家、茶畑柏木家、伊豆佐野勝俣家はお互いに縁があり、優れた文化人が出ていますが、この人々が郷土の文化を担ってきたのです。

連水の句

富士のふもと廻り尽さで老にけり

客に傘を持たせて菊の根分哉

茗圃の句

春の水心のまゝに流れけり

露夜や門訪ふ人のせき払い

〔参考資料〕渡辺家資料目録

柏木家資料目録(裾野市)

勝俣文庫目録(三島市)



連水、茗圃、九成の俳句奉額(浄土院)



歴史の散歩道

名主

「柏木文治郎」

芹沢充寛 ④1

いうまでもなく田畑を基礎にした農業経済のもとでは、山と水利は生産手段の一つであり、そして村落生活の基礎を作ってきました。

茶畑村をはじめ久根、公文名、麦塚、平松新田村の人々は、東山（種根西麓山林原野）に入り、まくさ、蒴藋、薪、用材、薬草などを採集し生活に供したのです。

滝頭不動尊堂の境内に東山に係わる献彰の記録が供養位はいに記されていますが、小田原城主福葉正則は寛永11年から天和3年まで50年間在職しました。

「此位牌の志趣者寛永十五年寅小田原先領主福葉美濃守正則朝臣之御時豆州伊豆佐野村与大沢山及諍論候事百式捨年来也然処寛延元年辰之十一月四日御社奉行福葉丹後守様御時御裁許相濟落着單依之流ヶ窪而田壹丁余為餉色奉寄進置者也

告寛延元年辰ノ十一月四日
駿州茶畑村 名主 柏木文治郎

組頭 市川弥七

と記されています。茶畑村は大沢山をめぐる伊豆国との当時者として100年間にわたり努力してきましたが勝訴となり城主福葉正則を献彰したものです。

正則は春日局の孫にあたり、父正勝は幕府老中を勤めていました。

茶畑村が入会山林に大きな權益を得たのはこうした歴史的な背景の中で他村をして認めさせたものと思われます。

同境内には、安政年間に境界争いで活躍した勝俣仁左衛門の頌徳碑が昭和39年に建立されています。

また文治郎は、定輪寺に今川氏歴代の位はいを納めています。が同家祖先が今川氏に仕えたのかもしれませんが。

名主文治郎は山論関係の資料を残しておられますが、小田原城主福葉正則の献彰位はいをはじめ定輪寺に今川氏の位はいを納めるなど、信仰心や崇敬の念が一層深い人物であったように思われます。

〔参考資料〕 柏木家文書目録（市教委）
市川豊栄氏資料提供・定輪寺資料

旧泉村部落有林野の歴史（S32年芹沢）



滝頭不動尊堂

歴史の散歩道

名主
「柏木甚右衛門」
芹沢充寛④



昭和8年天候は不順干ばつが続き公文名地先の三角堰は上流と下流で農民が鋭く対立しました。干ばつが直接原因ですが水利慣行の是非をめぐり、これは沼津警察署長の調停でようやく収まった事件でした。

旧茶畑村は村としては大きい稲作と畑作にとって水利は意外に恵まれていないことを象徴的に示した事件でした。名主柏木甚右衛門が深良用水の開発事業に積極的に参加した背景には、旧河川の位置からみて、30年前を想定しても一層厳しい状況に置かれていたからでしょう。

名主甚右衛門による「覚書」は貞享3年正月（1686）に記録されたもので深良用水が完成してから16年後のことです。他の記録と比較しても最も記述が鮮明なうちに記された精度の高い貴重な資料です。資料を最初に解読されたのは佐藤隆氏であり、市誌編さ

んの牧野先生が整理されました。その一部を紹介しましょう。

茶畑村名主柏木甚右衛門「覚書帳（天和三年亥ノ正月）」貞享三年寅ノ正月一、箱根越買未八月朔日子初、亥ノ四月廿日二出来候、水通り候事廿二日与通り候

堀抜仕候者江戸町人

友野与右衛門 浅井治左衛門

橋本山入 須崎源右衛門

甚右衛門は、農民からあるいは官側からも信頼されていた名主であり有能な人物であったように思われます。

友野与右衛門らの江戸町人の先進的な生き方、寛文3年（1663）箱根神社への立願状から元禄元年（1688）の退去に至るまで更に25年間にわたり接してきた名主の一人でした。

「甚右衛門は長命でしたが、資料所在目録」の記録からみても万治元年（1658）から享保4年（1719）までの足跡を残しています。柏木家墓地には、寛永11年名主久右衛門、寛文8年名主六郎衛門、享保10年甚右衛門さらに茗圃などの村の指導者たちが眠り続けています。

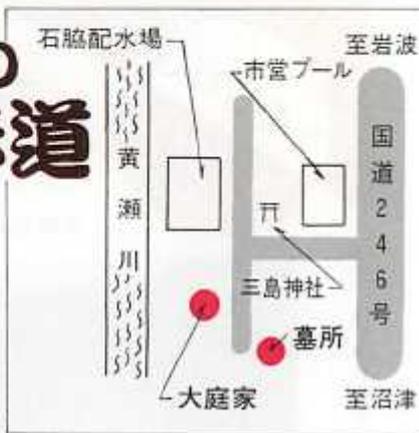
〔参考資料〕

新箱根用水史・深良用水の沿革

柏木家資料（柏木正枝氏、柏木有八）



名主が眠る柏木家墓地



歴史の散歩道

大庭唯吉と
自由民権
芹沢充寛 ④3

私たちが、現在の生活や秩序を守るだけならば進歩はないでしょう。

穏やかな風土の裾野にも個性を開花し、自己主張してきた多くの先人たちが、その一人が大庭唯吉でした。

唯吉は、文久3年、弥四郎の2男として石脇に生まれ、沼津の中学から静岡師範へと進んだ優秀な人物でした。父の弥四郎から「自由にやれ」ということで、当時10円を持って上京し、自立したと伝えていきます。

唯吉は、明治10年代、湯山柳雄（御宿）渡辺秀敷（須山）などと自由民権運動に参加し、岳南自由党にも加わり、各地で政治啓発、殖産振興、文化福祉などのテーマで演説しました。

明治14年に御宿の湯山宅、15年に御宿岳南小学校、下和田などで、政治の組織、経済論、羊飼いの話など幅広いテーマで講演が行われ、農民の多くが参加したそうです。

岳南自由党は、明治15年、新政府の弾圧、農民の先鋭化など中央とともに解散し、わずか半年間の活動でした。

唯吉は「自由と民権」という近代民主主義の思想にふれ、「豪農民権」という旧民主層出身の共通した制約のなかでの活動であっても意義を見出すことができず、その後は体制的思想に転換していきます。独身で通じた唯吉は、東京から石脇に戻り、昭和20年敗戦後の混乱のうちに亡くなりました。

唯吉は、その生涯を通しての思想、哲学の一部は大庭景申先生が明らかにしていますが、自由民権での後退、敗戦という価値観の転換に際してどのような思想的整理をされたのでしょうか。

資料の一部を紹介しましょう。
『以上古今東西の諸論説を自己研鑽の坩堝に綜合融解して更に新たに創造的、自得的に感得したる自己心内に於ける「渾然とした睿智的啓発」と其れに於ける「直観的統覚」に至っては実

に天衣無縫容易に言明し難い……』

〔協力者および資料〕
『大庭唯吉の思想と生涯』 大庭景申著
大庭美枝子様 大庭力様 湯山家文書



大庭唯吉の墓所



東名高速道路

● 金沢遺跡

○ 金沢堤

歴史の散歩道

④④ 市史編さん委員
芹沢充寛
蛇形土器を
残した人々

今年巳年。蛇は古代から人間にかわりの深い動物のようです。

今からおよそ4000年前、私たちの祖先というべき縄文人は、箱根西麓と愛鷹東麓の丘陵斜面に堅穴住居を設けて生活を営んでいました。

木の突の採集と狩猟が生産活動の基本で農耕は知らない時代のことです。

昭和49年、東中学校建設に際して、発掘調査し、丸山II遺跡から縄文早期の住居跡が発見され、蛇形土器の把手の部分が出土しました。

縦5センチ、横3センチ、厚さ4センチの鋭い三角頭で明らかに蝮ですが、蛇の口は真横に、頭の中央の刻み、恐怖感をおこす極めてリアルに制作されています。金沢遺跡出土の完形土器は、底部は失われていますが、現存部高さ20センチ、土器の胴部下半には粘土で作った6センチ×8センチの6個の蛇身文様を貼りつけ、

蛇身は円形の蛇頭を上方に蛇身を底部に向けてS字形にくねらせています。これらの土器は、縄文中期に出現しますが、勝坂式土器文化圏から出土し、蛙、亀……動物の象徴的なものとして、蛇が描かれたのです。

石野英氏は「石器時代の住民が毒蛇を怖れてこれに対する恐怖心を滅殺せんがために……」とトーテミズム（原始的な信仰）の存在を主張。藤森栄一先生は「最盛期の蛇身については、春になって土中から出てくる蛇のうち、特に蝮を春の新霊の神として尊び、神呪性をもつ動物であると考え、蝮を人格化し、生命の神の躍動する姿として、地母神の像として、土器などの表現に使われたのだ」と述べ原始農耕に結びつけています。

蛇は、中国の十干十二支では巳年で表現されますが、蛇蝎の如きとか嫌われる一方、知恵、黄金、蓄積など縁起の良い動物として人々に接する不思議な動物です。身近な民話「池の平」、神話「ヤマタノオロチ」に登場します。いずれにしても、巳年に当たり自然と祖先の精神活動の豊かさを思い起こし、跳躍の年にしたいものです。

（参考資料）日向、丸山I・II遺跡発掘調査報告書 菅沼英彦氏



丸山II遺跡出土土器



金沢遺跡出土土器

歴史の散歩道

④5 市史編さん委員
芹沢充寛
芹沢光治良と
裾野



知性の作家といわれる芹沢光治良先生は、沼津市我入道の生まれ。旧制沼津中学、一高、東大へ進学。国際的な作家となりました。この3月で満93歳を迎えますが昨年は「神の計画」を執筆されました。

私は、満90歳の先生の講話、3部作の構想を聴いたのですが見事に完成されて、なお健筆をふるわれています。

その時の印象を紹介しましょう。
先生は、沼津「芹沢文学館」の階段をだれの助けも借りずに昇降し、声も張りがあり、一つ一つのことばに心を込めて話されました。

人間が肉体という衣を除いた後に磨きぬかれた魂があるとすれば、かような人を指すのではなからうかという思いがいたしました。

講話は「富士山は浅間山とちがひ、雄々しくて、どこから眺めても荘厳だが、私にとっては、特別な教師である

から……。不幸な少年時代、ある冬の夕、自殺しようと、狩野川に身を投じようとしたところ対岸にそそり立つ富士山が真赤になつていかに死んでは、いかにおれが守るから……。と、叫んでいた。富士は人生の師となつたのです。昭和56年、裾野の石脇、大庭央積翁宅に先生が訪れました。芹沢文学館に文学碑が建てられその自然石は、石脇地先から運んだものです。先生は、たいへん気に入り、協力したのでそのお礼に見えたわけです。

央積翁は、石脇の旧家大庭雄一郎の長男にあたり、昭和60年、83歳で亡くなるまで、文人で通した人物です。村人から見れば、好きなことをしていた道楽ものに映ったかもしれませんが、「農業に専念しなければならぬ時に句会や美術展に出かけた」と長男の力氏は懐かしそうに語っていました。

翁に歌心がなく、文学に関心がなければ先生との出会いもなかったでしょう。裾野は先生とは無縁かと思つておりましたが、色紙には独特の書風で次のように書かれています。

ふるさとや 孤独のわれを
だきあげぬ

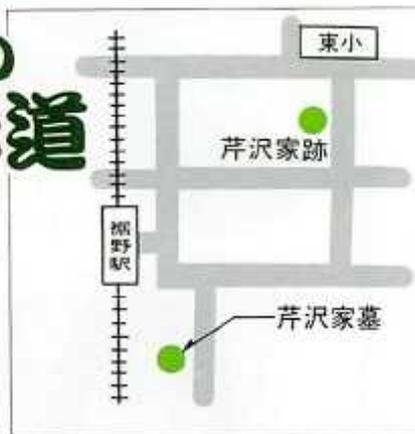
〔資料提供〕 大庭力様

ふるさとや
孤独のわれを
だきあげぬ

ハヤカミ翁

光治良

大庭夫特様に感謝して



歴史の散歩道

④6 市史編さん委員
芹沢充寛
芹沢多根と
地域発展

大正4年度村税負担額529円。これが芹沢多根の納税額です。

当時、泉村は57戸、村税5999円であり、一人で8割を占めており、資産は約60万円とも言われ、当地方では最高の資産家でした。

芹沢多根は、茶畑の旧家、芹沢伊三郎の長男として明治10年に生まれましたが、同家の祖先は、今川家の家臣であったと伝えていきます。

多根は旧制静岡中学校を卒業。頭脳は俊敏、人柄は育ちのよさを感じさせる反面、経済人としての厳しさをもっていたそうです。多根は、学校を卒業すると直ちに家業を継いでいますが、伊豆銀行、御厨銀行、片浜銀行、駿東銀行、芹沢銀行など地方の経済界、金融業界で活躍していました。同氏の先代が経営に参画していたと思われる伊豆銀行、芹沢銀行、貸付社は、明治17年の貧民党事件では農民から金利引下げな

どの対象にされました。

資本主義の原始的蓄積の過程、地主制の確立という背景の中で、明治から大正へ大正デモクラシーが高揚した時代に多根は活動したことになります。

大正5年、部落有林野の統一をめぐる政策では、箱根西麓山林原野1326町歩の統一（公有）の立場にたち、農民の多数が非統一を主張し対立。いわゆる泉村騷擾事件が発生しました。

多根の足跡としては、明治35年に村会議員、同41年に県会議員をして副議長、大正3年に泉村長に就任、政治的には政友会に属したと伝えていきます。

経済人ですから地域産業の振興・中小企業の発展に努めるなど、その基本である榎野から須山への県道の設置などに努力しました。

多根は大正12年47歳の若さで亡くなりましたが多根が健在であったならば、関東大震災、昭和初年の大恐慌など極めて切迫した経済状況の時代にどのような対応したでしょうか。

同家は、きびしい経済変動の中で株により資産を失ったと古老は伝えていきます。

（参考資料） 芹沢家資料



芹沢多根の墓

歴史の 散歩道



④8

市史編さん委員

芹沢充寛

作家「新田次郎

と裾野

作家・新田次郎は、本名藤原寛人、

明治45年に生まれ、現電気通信大学を卒業、昭和7年に中央気象台に勤めました。同41年まで気象観測の分野で活躍し、富士山気象レーダー設置工事では技術責任者の一人としてあたりました。その施設が改築された際のレーダーやドームの一部が市立富士山資料館で展示されています。

新田次郎は、山岳・歴史小説の分野に新たな作品をもたらした作家ですが自然の厳しさに立ち向かう情熱的な人間、厳しい条件のもとで歴史を創りだしていく人間像を描いています。

その作品の中に裾野地方が舞台になっている場面も多々あるので親近感を覚えますが、二、三紹介しましょう。

「新田義貞」では箱根竹下下の敗戦に「義貞は退却しながら、なぜこのようなことになったかを反省した。上將軍（藤原親王）」とそれにつきそってき

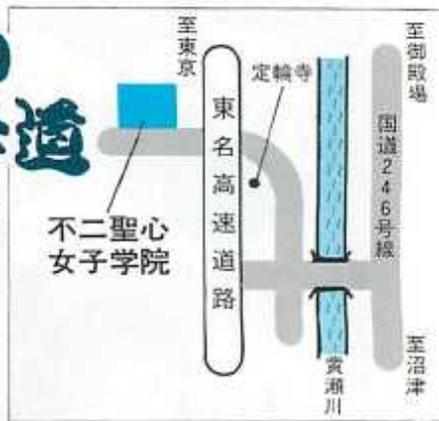
た二条中将爲冬卿（佐野原神社祭神）の存在が征討軍をして敗北に導いたことは明らかであり……。」と敗北の要因の一つに為冬卿らの動きを挙げています。当時、公卿が武人の実戦の場まで口出していたからでしょう。

また「着水」では「五龍の滝」を背景に2人は並んで滝を見た。「ね、守屋さん、私はこの滝に、名前をつけているの。左から愛撫、蹂躪、激情それから右の2つが平凡な夫婦。どう私のつけた名前と実際とは何か通ずるものがある？……」黄瀬川にかかる雄滝と雌滝で表現される5条の滝、五龍館という閑静で優雅なホテルがあったことを思い出させる描写です。

新田次郎の「怒る富士」の資料収集を案内された渡辺好洋氏は「信州の新田村出身だから新田、2男坊だから次郎というペンネーム。信州人らしい強い精神、観測所の技術者らしくまめめち密、田舎のおじさんのような飄飄とした雰囲気をもっていった」と印象を語っていました。



瀬川の濁流の向こうに五竜館が見える(S.13.6.29)



歴史の教歩道

④9 市史編さん委員
芹沢充寛

シスター・
エリザベス・ダフ

アイルランドは、イギリスとセント・ジョーシ海峡をへだて北海に面した島国です。アイルランド人の誇りは、永年の独立運動と宗教の自由を求めて、そしてゲルト文化の中で培われたものでしょう。

シスター・ダフについて、シスター・伊藤松野の記録から紹介しましょう。

シスター・エリザベス・ダフは、1934年に故国アイルランドに別れを告げてカソリック宣教師として東洋に派遣されました。51歳の時でした。長い船旅の疲れを癒して目的地上海に赴



聖心女子学院 王昭さんスケッチ

き、そこで17年間布教に尽力されました。

第二次世界大戦の終わりがころ上海聖心の院長が帰天されるとシスター・ダフは、代わって修道院内のシスターたちにこまやかな愛情を示され、またすべての人々を笑顔で迎え、悩みを理解し、喜びも悲しみも共にされた。その後、シスターの毎日でした。終戦後、シスターたちは上海を引き揚げて日本に渡ってきました。

1952年に裾野の不二聖心女子学院創立と同時に初代院長として就任されました。その間、生徒たちに英語を教え演劇の指導をされたのです。

昔の教え子たちは、今でもシスター・ダフを「母のような優しさで理解の深さ、一人ひとりを大切に、お祈りをいただいたことを忘れることができない」と語っていました。

シスターは、1962年に終生誓願50周年を大きな感動の中で迎えられました。故国へ一度も帰ることなく「布教地に自分の骨を埋めたい」という願いはかなえられ「信仰と愛の使徒」であるシスターは88歳で帰天されました。1971年のことです。今は不二聖心の墓地に安らかに眠っています。

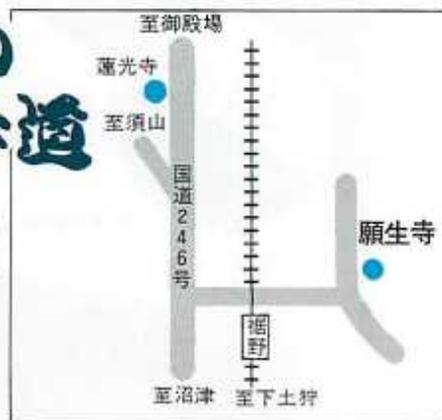
私は、シスターの気品のある理知的なお顔、宗教人としての純粹性、厳しさ、内面的に磨かれた人柄については遠くから拝見しただけですが印象に強く残っております。

(協力者)

シスター・伊藤松野、王昭様

歴史の散歩道

⑤〇 市史編さん委員
芹沢充寛
阿弥陀如来坐像
と製作者



裾野市佐野蓮光寺竹内住職から、「裾野願生寺阿弥陀如来坐像と運慶」山田泰弘氏報文をいただいたのは4年前のことです。その坐像は、文化財保護の目的で願生寺を訪れて幾度か見る機会がありました。素養がないため、鎌倉時代」とは思いもよりませんでした。願生寺は、落政時代には駿河志料や言い伝えでも箱根竹之下合戦で宮方の戦死者を葬った所と伝えていきます。

先の報文には「……当尊は運慶仏にきわめて近く、その近さは運慶の兄弟弟子の尊像以上といつてよい。例え運慶造立でないとしても……つまり鎌倉時代のごく初期、十二世紀末の造立とみてよいだろう。……」と発表されました。

同寺に保存されている仏像のうち一体「阿弥陀如来坐像」が鎌倉時代初期（12世紀末〜13世紀初頭）、しかもその時代を代表する彫刻家運慶に近い者の

作品と観られている——美術史のうえで、当市にとりましても貴重な文化財です。坐像を見た印象は、写実的で重厚な作風、意思力の強さを示す顔、理知的な眼、全体には頭部と胸部が重厚で、それをうけとめている腰部や脚部がやや細めにしまっています。均斉のとれた印象を受けました。仏像に自らの理想をこめて製作している点が運慶一門の特徴だと言われていますが、当時の技術者集団（仏師）の中から快慶、湛慶ら多くの仏師が出て活躍しました。

私は、伊豆願成就院や京都蓮華王院などで運慶の仏像を見ていますが、新しい時代の流れを背景にその豪放な力強さ、精彩に富んだ写実はやはり印象に残っています。

私は、タイムマシンにのって、坐像の製作者に会ってみたいと思いました。運慶の指導で青年仏師の手で刻まれたかもしれません。どのような風貌の持ち主だったのでしょうか。800年前の作品が現代の私たちに語りかけてくるのは、ヒューマニティと造型的表現力がすぐれているからではないでしょうか。

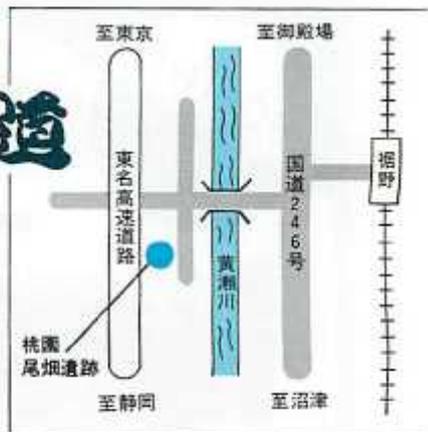
資料提供 蓮光寺竹内住職
願生寺檀家・杉山好様



阿弥陀如来坐像 願生寺蔵

歴史の 散歩道

⑤1 市史編さん委員
芹沢充寛
人面土器を製作
した人々



「郷土の土で焼いた土器を観てくたさい」という文化展を催したことがあります。

私達は、土と、火に人間の手を加えることによって、土がさまざまな形になる魅力にとりつかれました。その中から愛鷹東麓と箱根西麓の4か所から採取した粘土では実用にたえる土器が製作できないことが明らかになりました。また、発掘調査をした縄文土器片の分析を地質学者に依頼したところ、使用されている粘土は、山梨か丹沢方面のものと思われる、という分析結果が出ています。

桃園尾畑遺跡出土のいわゆる、人面土器は、縄文文化の最高峰をゆく土器と思われませんが、この土器は宅地造成中、小雨降る中で歌崎久作氏ら裾野郷土研究会員らの情熱で保存することができた記念碑的な意義をもつ土器でもあります。

人面土器は、縄文中期という狩猟、採集、漁労の自然経済がもつとも成熟した、山の文化、ともいえる文化圏、勝坂式土器文化圏からのみ出土しています。およそ4500年ほど前にも、共通の形、表現、製作技術などがありました。尾畑遺跡の人面土器とより二つという人面土器が山梨県の穂坂遺跡などから出土しています。

土器の用途は貯蔵、煮沸、装飾用に分けられています。人面土器は装飾用に入りますが、より切実な生活の中から、そして縄文人の美的感覚から製作されたものでしょう。

人面土器は、単に木の実が豊かになっただけではなく、疾病や災害をもたらす魔物に対する魔よけの意味をもっていたかもしれません。そして、人面土器を製作したのは甲州の縄文人なのか、尾畑縄文人であったのか興味がつきません。集落では分業が行われ女性も土器製作にあたったものと思われるます。

資料 裾野郷土研究第4号

裾野の文化財

友陶会・サークルあしたか



顔面把手付土器

歴史の 激歩道

⑤2 市史編さん委員
芹沢充寛
故遠藤三郎代議士



感じさせる人物でした」と地元の人々は今なお親しみを込めて話します。
自民党に所属し、藤山派の筆頭格でした。自民党は派閥の連合体ですが、当時、絹の政治家と言われた経済界出身の藤山愛一郎氏と行動をともしたのはリベラルな共通の理念があったからでしょう。

特に青年、女性に対する政治、経済文化の啓発に努めましたが自民党の近代政党への成長を促したのです。

現在、政治家の資質が問われている時代です。その人物の理念が、知識の蓄積がどれほどなされているでしょうか。

政治への大衆参加が政治家のレベルダウンでは困ります。

遠藤代議士には、実兄の遠藤佐市郎氏と同様に自由社会を通しての理想がありました。「自民党に所属しても知性が豊かで利権に拘束されずに清潔感を保ったので手弁当で選挙運動を行った」と地元民は伝えています。昭和46年に67歳で亡くなりました。

資料 銅像建立趣意書ほか

④ 遠藤佐市郎氏(実兄)・元裾野市長・旧制浦和高校(教授)

郷土の生んだ政治家と云えば、遠藤三郎代議士を挙げなければなりません。遠藤代議士は、明治37年旧富岡村に生まれ、旧制沼津中学、一高、東京帝国大学法律学科を卒業し、内務省から農林省に入り、総務局長、畜産局長などの要職を経て官界から政界に入った逸材でした。

昭和24年衆議院総選挙に当選してから22年間、9回連続当選を果たし、戦後復興期から経済成長期に活躍し、その間、大蔵政務次官、建設大臣を歴任、国土開発、農林水産業の振興に大きな役割を果たしました。

具体的な施策としては、モータリゼーション、地域開発の進展を見通して、首都高速、東名高速道路の建設、狩野川放水路の改修、酪農の振興などに見ることが出来ます。

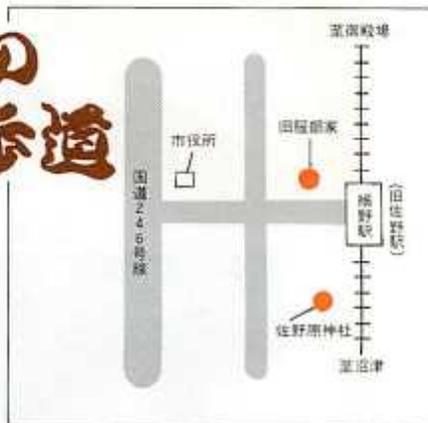
遠藤代議士の人柄は、「人間味にあふれ、柔和で静かな態度、秘めた気骨を



故遠藤三郎代議士の像

歴史の 散歩道

⑤3 市史編さん委員
芹沢充寛
服部大八と
大誦



大誦は、実地測量伝習所（神山）を卒業し、測量業務に従事。東山の入会の訴訟、深良用水の発電水利に係わる契約などに活躍しました。

明治21年、東海道線開通に伴い、佐野駅（裾野駅の旧名）が開設されましたが、当時蒸気機関車の水の供給は必要であり、駅間の距離は日本一、勾配もたいへんな所でした。そのため水利権の提供などということ但现在の位置に停車場が設けられましたが大誦の功績といつても過言ではありません。

大誦は、その後運送業、旅館経営、駅前公共電信などを営んでいます。裾野は藪の集積場、箱根竹の出荷など当地方のターミナルの役割を果たしてきました。また富士山須山口登山道にあたり地域発展に努力しました。

大誦は、泉村村長を2回にわたってとめていますが先見性に富んだ人物でした。泉村騒擾事件の際は、非統一派に属しながら事態を冷静に見ています。和歌や俳句を詠い、且松と号していましたが大正8年、61歳で亡くなりました。

協力者 服部位様

服部大八は、天保12年、服部大助の長男として平松に生まれました。大八は、幕末文久2年、大久保加賀守の元で組頭。明治維新後の明治7年に石脇村外9か村の副戸長、同8年第一大区三小区23か村の副戸長をつとめ、当時の地方政治の一端を担いました。王政復古が成った明治8年以降南朝の忠臣二条為冬の事蹟頭影や佐野原神社社殿の建設に努力しました。境内には、有栖川宮義額、谷干城の撰文などの石碑が建立され、東久世通禮ら連名趣意書、九条道孝ら当時の各界名士の書などが多数保存されています。碑記には「……駿人服部大八分三好維堅来請日……」と足跡を刻んでいます。「大八は実践的で豪放石落であった」と縁者は語っていました。大誦は、安政5年、鈴木彦四郎の3男として佐野に生まれ、大八の養子に入りました。



服部大誦東山に関する「覚書」大正7年?

歴史の 散歩道

大審院判事 渡辺方謙

⑤4 市史編さん委員
芹沢充寛



富士山麓の旧須山村からは、個性豊かな人物が幾人も出ています。富士信仰の御師の村であったことがバックボーンとして生きてきたからでしょう。

渡辺方謙は、勝田宗次郎の4男として慶応3年に生まれ、沼津渡辺家の養子、さらに明治18年に勝田三平の2男として入籍しました。

方謙は、養子にのぞまれるほど優秀な少年であり、当時、葦山中学、第三高等学校(京都)、東京帝国大学法科という文字どおりエリートコースを進みました。

明治22年大学卒業と同時に司法界へ、同24年判事補として任官、裁判官の道に入りました。

渡辺徳逸翁は、方謙が裁判について語ったのは「死刑の判決を生徒に一度下した」ということだけだそうですが、罪刑法定主義のもとでは当然であった

でしょう。

それにもかかわらず印象に残っているのは、罪を憎んで人を憎まずという人間性への深い思いがあったからでしょう。

旧憲法の下であつても人権の尊重という法の番人としての義務と軍閥が胎頭してきた時期ですが、方謙は始終毅然とした態度で司法の独立性は貫いたと思われまふ。

毅然とした態度の中に、方謙の人柄や哲学を汲みとることが出来ます。

墓誌には「……以来地方裁判所、控訴院等ノ任ニテ大審院判事トナル昭和二十年……病死ス」と刻まれ行年77歳、子どもがないので、勝田博士や渡辺徳逸翁らの手で建てられたものです。

大審院とは今の最高裁判所その判事です。ですから極めて権威があります。

昨今、小利口に立ちまわる、視野のせまさを感じさせる人間が多いなかにあつて、磨きぬかれた知性豊かな人物が郷土から出たことの誇りと一つの安堵感がわいてきます。

資料・墓誌 協力・渡辺徳逸様



渡辺方謙之墓 (勝田家墓所=須山)



歴史の散歩道

⑤⑤ 市史編さん委員
芹沢充寛
服部久五郎・市太
郎と順礼供養塔

旧富沢村の服部久五郎とその息子市太郎は、明治21年に「西国順礼旅鑑」ガイドブックを書写しました。

この「鑑」は、原刻元禄10年、再刻寛政3年、三刻文政7年、それを筆写したものです。その中に1枚「道中持物並心得」がありました。現代に通ずる記録がありますので紹介しましょう。山中にて もやにあいたるときむめほしを口にふくむべくこの毒あたらす

一、近か道をあんない寿る人 阿りと
もけつしてゆくべからず、なんじ
字寿る毒あり……………

服部家は、水野藩の袖筆を勤めた家柄で、大黒柱の基礎には古い家から移した一字一石の経石が大量に埋蔵されています。同家では代々信仰心の厚い者、教育者、勉学に励んだ者が出ていますが幕末渡辺小華などと交流があったようで、文人画なども保存されています。

ます。

観音は33に化身し、人間が悩める時だけに現れるという庶民信仰の一つですが、観音供養塔は昭和52年の調査では、東・西地区で51基を数え、「西国横堂」「百番」「駿豆順礼」など17に表現されていました。

観音に対する人々の崇敬の深さを感じますが、久五郎・市太郎の信仰の深さは格別であったようです。供養塔を建てるといふしくくりをしたのは、久五郎59歳、市太郎34歳の時です。

供養塔は、黄瀬川沿いの、甲州街道、旧道の脇に題目碑、庚申塔、馬頭観音などと並んで建てられています。

明治三十辰年

西国 坂東

奉納 秩父 横道 供養塔

駿豆 新四国

九月十八日 施主服部久五郎

服部市太郎

18世紀から19世紀にかけて庶民信仰の高まりの一つの有終の美を飾ったように思います。

資料 服部芳太郎様

裾野郷土研究七号



観音供養塔 (服部久五郎・市太郎建立)

歴史の散歩道

大庭源之丞

⑤7

市史編さん委員

芹沢充寛

指入證文

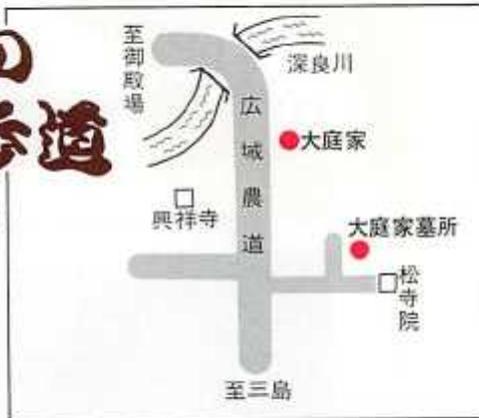
一、今度箱根湖水之水駿河戸峠ヲ掘抜
 ……水引新田相開キ……貴殿草分け御
 手引ニ付、貴殿萬端御苦勞ヲ掛而、地
 方並私共御差圖相隨ヒ、御厚実之段候
 共……

江戸浅草 元締 友野与右衛門
 (略 三名)

駿河国御厨深良村
 御発企 大庭源之丞殿

右の記録によると、深良用水の開鑿
 を発起し参画したのが源之丞であるこ
 とは、元締友野与右衛門ほか3名らが
 謝意を記していることからわかります。

幕府に対する正規の手続きが完了した
 寛文6年に出したもので、元締側から
 みた源之丞の役割、信頼できる人物と
 して評価しています。源之丞は農民を
 代表する人物、すでに寛文3年に箱根
 神社に納めた「欽白立願状」以前から
 普請、見積り、水量などの共同の調査



計画に参加したものと思われます。

寛文10年晩秋、町田に建立された庚
 申塔に七言絶句が刻まれています。

「請願信心すれば上天に徹し三戸穩
 正して安全を得庚申の妙相端然と
 して現れたに騰り今を輝す渡世の
 縁」

源之丞は15名の施主のひとりですが
 深良用水が完成した年にどのような思
 いをこめて建てたのでしょうか。

当時としては大事業ですから自らの
 利益という視野のせまい立場で活躍し
 たとは思われません。先導者として終
 生きびしい立場におかれたにちがいあ
 りません。

当主大庭重一氏の旧墓所に

「任玉一運上坐堂

一性円一切性

日林妙珂大姉堂」

没年元禄15年2月9日と刻まれ、源
 之丞夫妻の墓塔と思われます。

墓塔は、文化財・郷土の先人の史蹟
 として保存していきたいものです。

資料

大庭家墓所資料 大庭景申様
 大庭重一様

深良用水の沿革 芦ノ湖水利組合

箱根用水史 佐藤 隆・著

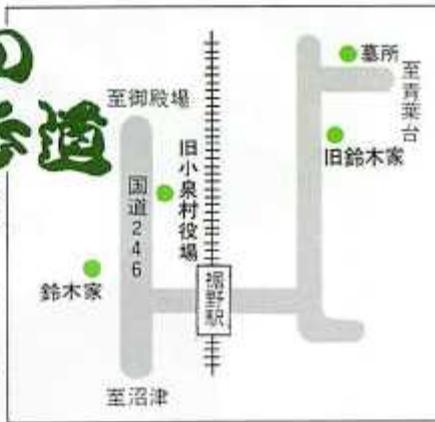
裾野庚申塔 安田 弘・著



大庭源之丞の墓

歴史の 敬歩道

「懐の深い」
鈴木格翁
58 市史編さん委員
芹沢充寛



鈴木格翁は、昭和26(1951)年小泉村長をつとめ、小泉村と泉村を合併し掘野町をつくる推進役を果たしました。

翁は、明治42年小泉尋常小学校の落成式には実父鈴木直枝とともに招かれて、父子で祝辞を述べていますが翁は深良小学校校長で教育者でありました。翁の妻父鈴木直枝は、水戸藩の浪士で桜田門外の変と係りがあつたとも言われています。

維新後、近代教育の中で直枝の果たした役割は大きく、視野の広さ、教育内容など水準の高い足跡を残しました。翁はそれを受け継いだものでしょう。

「……農村経済の多難時代に優れた農民の指導者として農業団体の発展……産業組合農業会合併……」と農協の前身の団体でも活躍し感謝状が贈られています。翁には、いくつかのエピソードがあり人柄を示しているので紹介しましょう。

まず、小泉村長選挙に際して立候補の意思がなく夫婦で旅行に出かけている間に、日ごろ翁に敬意をほらつていた有志たちが立候補の届出をして見事に当選しました。ですから選挙費用は一銭の支出なし、陣中見舞に届けられた酒類なども一切持ち帰っていたきました。

もう一話は、戦前のことですが西小学校の南側に入サという紡績工場があり、紡績産業が不況で工場も閉鎖されました。翁は、その残務整理に当たったのですが、夫人の貯金までも投入して女工たちの退職金、帰郷の旅費にあてたことが当時話題になりました。

夫人は発明家として知られる鈴木忠治郎翁の妻。鈴木芳子図書館長は、叔父にあたる翁のことばとして「腹が立つたら5分待て——10分がまた……」は肝に銘じているそうです。

翁は、昭和41年、90歳で亡くなりました。美化するわけではありませんが翁のような懐の深い人物はもう現れないのではないかと翁を知る鈴木強氏は語っています。

資料提供・協力者
鈴木芳子様 鈴木強様
杉山智恵子様ほか
市内小学校記念誌



鈴木格翁の墓

歴史の 散步道

裾野を歩く
スケッチ作品集から



59 市史編さん委員
芹沢充寛

文化の融合と 王昭展

中国の画家王昭氏は、裾野にみえてから7年、市民として3年間幅広く活躍され、去る3月東京都へ転居されました。

裾野は、第二の故郷。と言っており、次女に王静と名づけました。

日本へは8年前、東京芸大平山教授研究室へ留学、目的は伝統的な中国画と現代日本画との融合という独自の世界を創ることにありました。

文化の融合とは、云うは易く成り難し。という困難な事業であり、単なる技法ではなく精神的に溶けあうことを意味するのです。文化交流、融合は私たち日本人々自身の現代の課題ではないでしょうか。

一昨年、県立美術館での個展は、西夏王国展が催されましたが6日間で約1万人の方に鑑賞していただいて、多くの方にインパクトを与えました。融合の成果に魅せられたものでしょ

うか、墨彩の富士山など。

王昭氏は、高校生の時文革に直面し北京の両親の元を離れて西安の郊外などで約10年間過ごしました。氏は「日本の学生は恵まれている。それをどう生かしていくのだろうか」と未来を温かく見守っています。

王昭―元麗昭、中国では名前で出身がわかるようですが、氏の父は日本の文化交流のうえで仏教文化などをもたらした宋を侵攻した金王朝27代目、従って氏は、28代、金王朝は蒙古の圧迫をうけて衰退しました。母は愛新覚羅氏、満州族で北方民族。北から進攻、北京に30年間清朝として中国を支配しました。母はラストエンペラーの6番目の妹。聡明、美人、気品の高い女性、画家。王昭氏はそうした資質をうけついでいるように思います。

記憶力は抜群、繊細でおおらかな人柄「美術は人格の表現にほかならないのです。カタログには「……私は厳冬の富士が好きだ。心に屈託のない時に見る富士はいかにも温かく穏やかだ……山も人間と同じように喜怒哀楽をもっているのだろう」と述べています。氏は39歳。親しい友人として裾野での創作が美への飛翔の佳き過程であれば幸いです。



外国人で初めて深良用水に入る王昭氏(右)

歴史の 散歩道



60

市史編さん委員

芹沢充寛

市民大学と

高草茂先生

本年度の市民大学講座が生徒学習の一環として市民サイドの内容で近く開講されるでしょう。

昨年は「日本の美・世界の美」―美術を見る眼―のテーマ、ヨーロッパの美術をスライドを使って高度な内容ですがわかり易く感銘深い講話で好評でした。講師は高草茂先生。

先生は公文名生まれ、現在岩波書店顧問、国際的な美術書等の編集で活躍されています。

旧制沼津中学から旧制浜松工高（航空工学）へ、敢戦により東大文学部美学美術史学科に進学、岩波書店に入社、主に美術関係の書を手がけてこられました。

昨年の市民大学には、ヨーロッパから帰国されたばかりで、東西「ベルリン美術館」の美術書が刊行され、両ドイツ政府からの招きで訪欧され、ベルリンの壁崩壊のあの歴史の流れを眼の

あたりにしたそうです。

エピソードの一つ。先生が小学校五年生の時「佐野原神社縁起」という絵巻物を描いて、それを東京の展覧会に出品。小学生の作品とは思えないほど緻密、色彩・構成が見事であったことが当時人々を感動させました。

今冬放映予定のNHK「ベルリン美術館」の編集に協力するため、この3月渡欧。東西ベルリンを訪問し、壁崩壊後の現地の状況や、特に東の人々の感想などを見聞して参りました。ドイツに比べ、日本は、何と穏やかな政治風土か」と痛感させられております。」と手紙に記されていました。

また、「海外史料からみた支倉六右衛門」―近世のローマ使節のことなど、多数の論文を発表されています。

文化会館の建設など、堀野の文化が質的発展を望まれる時期に、先生のような国際的に豊かな視野、内外の美術文化に極めて造詣が深く、洗練された信頼できる人柄……その力を堀野にお貸し願えればと勝手に思っています。

なお併人勝又一透先生は義父にあたります。

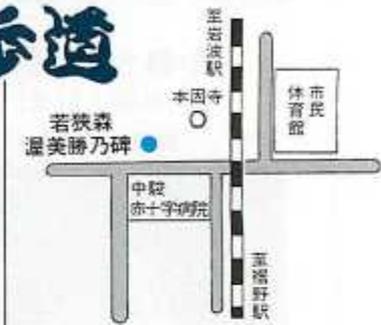


昨年の市民大学講座 講師高草先生

歴史の散歩道

昭和の「桃太郎」 渥美 勝翁

⑥1 市史編さん委員
芹沢充寛



裾野市佐野の若狭森で。渥美勝翁乃命碑。と刻まれた右下の石碑を見たことがありませんか。書は頭山満翁によります。

渥美勝翁は、明治10年彦根生まれ、昭和3年東京で亡くなり、親しい友人、同志の手で石碑がこの地に建てられました。

私が小学生のころ、昭和維新を唱え、桃太郎と称し、幟を持った写真が掲載された本を見た覚えがあります。碑文を記した頭山満翁は近代日本の代表的な国家主義者として知られ、玄洋社を組織し、大アジア主義という政治思想で啓蒙し、政財界に隠然たる影響力を及ぼしました。

その中から日本の軍部と結託、国体明徴論を展開したのが大川周明。太平洋戦争の敗戦に至るまで精神的な支柱の役割を

果たしました。

渥美翁は、頭山満翁の元にありながら、大川とは異なっていました。近代思想史の流れから言えば、右翼に位置づけられます。もともと日本人の精神的源流は、シャーマニズムにあります。シャーマニズムとは、原始呪術の信仰。日本では水田農耕社会の中で呪術を司る巫女。古代神道と古代天皇制。古事記や日本書記などに描かれています。

翁は、人間の直感・靈感・情熱……シャーマニズムの延長として純粹性を求め、明治維新の再革命、内なる昭和維新を叫び、その象徴として昭和の桃太郎を称して訴えたのですが、純粹性を求めるほど孤立化していきました。

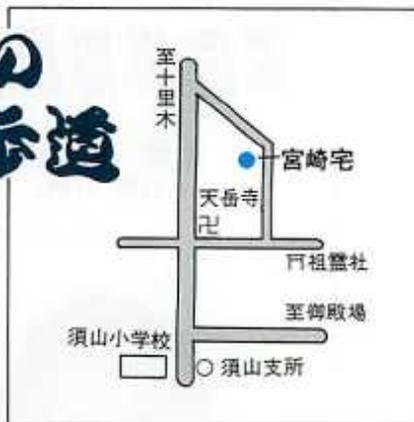
富士山の裾野若狭森の地は、翁が遊説行脚に疲れ果てた時に、食をいただき共感を得て人情の温かさに接して印象に残ったものでしょう。翁が、ここを永遠の眠りの地と決めたと伝えていきます。碑の裏面には「富士を負ひ海原見ゆる裾野あたり牛追ふたつき夜々夢に入る」昭和5年ころ、除幕式には佐実生も参列しました。

資料「桃太郎渥美 勝」

本因寺・鈴木 強棟



渥美 勝翁乃命碑



歴史の散歩道

浪曲師
浪花屋左団次

⑥ 市史編さん委員
芹沢充寛

浪花屋左団次は本名宮崎玄之吉、明治元年伊勢国一志郡で生まれ、東京で浪曲の修行をつみ、初めは芸名を美三保と名のりました。明治二十年代から伊豆、駿河、相模地方を主な舞台に巡業して歩きました。

妻喜知は、病気のため盲目となり、妻からは自活できるように鍼灸師になるよう勧められました。三味線曲師となりました。

左団次は、巡業先の沼津で喜知を知り、人柄とその音色に魅かれて結婚したと伝えています。

浪曲＝浪花節とも言いますが、大衆芸能として大阪の方で明治から大正にかけて、たいへん流行したことからそのように呼ばれました。

三味線にあわせて、低声で詠唱する部分と語りの部分に分かれています。一人で語り分けるところに面白さがあり、一人芝居形式の感じがいたします。左団次は、当時、地方演芸の人気者で

した。声が低くてよくとおり、一節ごとに表情が豊かでユーモアがあり、所作がみごとで聴衆を自分の世界に引き取りこむほど迫力がありました。

当時、村祭りの余興は、農村の最大のレクリエーション、前座は喜知がつとめ高座が左団次、各村での読物は続き物でしたので翌年へ続いていきました。左団次は、単なる芸人でなく時代の先端をいくセンスをもっていました。北駿地方に蓄音機、活動写真などを持ち込んだのも左団次でした。

『今晚うかがう芸題は』左団次が残した芸題目録をみてみますと、大岡政談天一坊ほか6題、目録以外にも含めて少なくとも70以上はあったようです。喜知は、三味線の音色は爪のおさえで決まるので独自で努力し、盲目のハンディをみごとに克服しました。なお、コミュニケーション活動でいつも明るくユーモアを発揮、美声の持ち主でした。須山の宮崎寿々恵さんは、浪花屋左団次、喜和の娘さんです。



左団次 芸題目録の一部

資料提供

宮崎寿々恵様 (満80歳)

歴史の教歩道



⑥3 市史編さん委員
芹沢充寛
富士登山道
須山口と外国人

明治維新は文明開化をもたらし、政治、経済、文化すべての分野にわたりヨーロッパの文化を導入し、早急に近代化をはかろうとしました。鉄道が東京―小田原間を走ったのも、一世紀前のことでした。

東洋の発展途上国日本に科学、教育、医学、美術……モース、シーボルトなどすぐれた外国人が国際的な文化交流をはたした時代であります。

ここでは須山を通して登山をした明治前期の外国人を挙げてみました。

英国公使館の関係者デイキンズがサトウと共に登った時の状況は、描写がすぐれています（「遠い崖」から）。

「……八月一日にかけて七泊八日の富士登山の旅に出た。……箱根で先行したデイキンズ夫妻と合流した。公使館書記官のマウンジーとその夫人も箱根に来ていたが、これは登山のためではなく、避暑のためであったらしい。

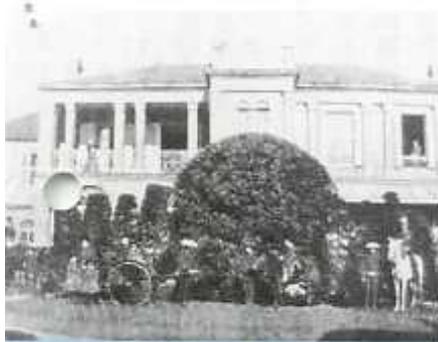
……サトウはデイキンズとふたりで、

二十八日に箱根を発ち、その夜は須山（裾野市）に泊まり、翌二十九日の午後六時に富士の頂上に達し、山頂の小屋で一夜明かした。

翌三十日は午前四時に起床し、富士山頂での日の出をこころゆくまで味わい、ふかい感銘をうけた……”と記録しています。

またモールはドイツ貴族、日本の外務省の雇用で宮中に勤務、公的行事に影響を与えた人物。

「……（ポツヒエ男爵ら）わたしたちは早朝、芦ノ湖の対岸で雇った馬に乗り、第一日は萩原を越えて富士の裾野に密生する森の一端に着いた。須山の側から山道はいくつもの巡礼の休息所を経て、数時間はかなり楽なコースをたどりつつ山を登ってゆく……一行は日没前に山頂に達することができた……頂上から下界を見下ろし、驚くべきことに二つの方向でみることでできる壮大な風景に圧倒された……”と記録。デイキンズやモールは教養もあり日本に理解の眼をもっていました。当時須山の人々は外国人とどのように接したでしょうか。



東京のモール邸
ドイツ貴族の明治宮廷記から

歴史の散歩道

⑥4 市史編さん委員

芹沢充寛

入江元待従長と

佐野原神社



昭和49年1月13日午前10時、大雪の日、私は皇居の中、宮内庁の応接間に座っていました。

皇居は見渡すかぎり白銀におおわれ静寂、古風な建築物が別世界に見えました。

入江相政待従長（先生）は、若い私の面会の申し出を快諾され、目的は、「二条為冬卿の人間像」のお話しを伺うことにありました。入江先生は、学習院大学文学部の教授、昭和9年に待従、同44年から60年まで待従長の大役を勤められました。

この間は、昭和の激動の時代を昭和天皇の元で戦争など国の内外の諸事件にどう対応されたのか天皇のお気持ちを伝える貴重な存在でした。単なる待従ではなく皇室と国民を結びつける努力をされました。またテレビ「すばらしき仲間」に出演、慶大池田名誉教授などと随筆、歌、ユーモア……裏に自由闊達に語り、幅広い文人の魅力を発揮し

ていました。気品があり、天衣無縫というおらかな人柄、古典的な公卿の容貌と雰囲気をもっておられました。随筆「日日是好日」や「史話と伝説」に二条為冬卿、佐野原神社のことを書いております。

「私は冷泉のほうの流れを汲むもの……直系の子孫というわけではないが……子孫の代表のつもりで、ここに参る……」と希少価値の為冬の直筆、短冊2点を大切に保存されています。

先生は「公卿」というと臆病者と思われるが、2男、3男で剛胆な人物は出ている。為冬もその一人だと思ふ。書も素朴だがとても良い。30歳？たらずで東国のこの地で戦死した若き歌人に夾に深い愛情を注がれています。

平松佐野原神社氏子の招きで参拝されてから半世紀、裾野にかぎらない親近感を寄せられました。佐野原神社への類。

「うちよする駿河の國、裾野の里に、清らかなる山水の、たぎち流るる一隅あり、遠つ租、二条為冬卿、このかたほとりに、ねむらせ給ふ」などと中古文風に書かれています。昭和60年80歳で亡くなりました。

②二条為冬卿 歌人藤原定家を継ぐ家柄

建武2年 箱根竹之下合戦、佐野原で討死

資料「日日是好日」などから

水

かきこぼす水は、こぼれぬ水

二条為冬卿の和歌

歴史の 散歩道



⑥5 市史編さん委員

芹沢充寛

蓮光寺と

飯田良傳上人猊下

裾野市佐野に蓮光寺という古寺があり、次のような文化遺産を残す興味深い寺です。

蓮光寺の末寺茶畑願生寺には鎌倉時代の運慶派の作阿彌陀如來坐像、末寺久根観音寺に円空風の木像10体、安土桃山時代の後陽成天皇の直筆と伝える偏額、御厨横道31番の札所、近くは歌人牧水と秋灯翁との「どこやらのお寺のもりの椎の実は……」の寺。

この寺の住職として明治36年から昭和9年まで34年間在任したのが飯田良傳上人でした。

上人は、明治13年東京に生まれ、12歳にして得度僧となりました。時宗学林高等学院高等科を卒業、史学館にも在学。また正則英語学校英文科も卒業。明治30年代にヨーロッパ文化にもふれていました。

上人は、蓮光寺住職のほか神戸市仏教連合会会長、時宗宗学林学頭、総本山の各役員を歴任、昭和21年総本山清

淨光寺住職、53代、時宗法主。藤沢遊行寺70代の法灯を継承しました。時宗の宗祖一遍上人は、遊行、という修行の旅が俗物性を捨て去る実践道場であると説いています。

戦後の混沌とした時代、民主化の時期に上人は春秋遊行教化の行脚、全国に足跡を残し、法式声明の勵行普及等を指導されました。

郷土では大正12年裾野園芸組合をつくり果樹、作物の改良などを指導、夜間には村の青年たちを集めて相撲をとったり、英語教育などの寺小屋を開講。竹内住職の結婚式での祝辞。

「……自己修養ニ志シ常に、他阿彌陀仏同行用心大綱」ト力佐教大師ノ「山家学生式」ナドヲ座右ニ離サズ自策自動シテ明日ノ「我レ」今日ノ「我レ」ト異ナル底ノ修養工夫アルベキデアアル「先ノ止セリタル樹ハ番本トナリ得ナイ………」と。

若き青年僧の門出に修養を求め座右の書を示し、几帳面な書体で愛情をこめて書いています。

上人は昭和29年75歳で遷化。蓮光寺に「大僧正一求上人墓」碑が建てられています。(協力・竹内住職)



大僧正一求上人之墓(蓮光寺)



歴史の散歩道

ろさん
廬山と定輪寺

⑥⑥ 市史編さん委員
 芹沢充寛

桃園山定輪寺は中世の文学に登場、芸術家宗祇が眠る古寺。

宗祇の高弟、宗長の記した「宗祇終焉記」に「……駿河の国の境、桃園といふ所の山林に寺あり、定輪寺といふ。此寺のいりあひのほどに落ちつきぬ……閑静でうつつそうとした森の中の様子が浮かんできます。宗祇は文龜2年、旅先の箱根湯本で病死し、この寺に葬られました。

寺記の「開創と沿革」には、永享2年禅宗に改宗し脊屋宗能禅師を請うて開山第1世。

第3世住持学甫永富は、宗祇に「天以」の道号を与えたと伝えています。それは永富と宗祇の結びつきを示すものでしょう。

永富は宗祇を追うように翌年亡くなっています。

禅林としての修業はきびしく、宗教者、歌人としてもすぐれた禅僧が出たと言われています。時代は下って、そ

の中の1人、第23世廬山は石眠と称したのでしょうか？石燈籠などに刻まれており詠い手としても相当な人物であったと思われる。

安永5年（廬山）

寛政4年（石眠、官里ほか）

寛政12年（石眠ほか）

宗祇三百年祭には茶畑村柏木官里、富沢村渡辺虎杖、六花庵官鼠と共に献句。当地方の俳人たちとの交流を見ることが出来ます。石眠と刻まれた句。

燈籠の

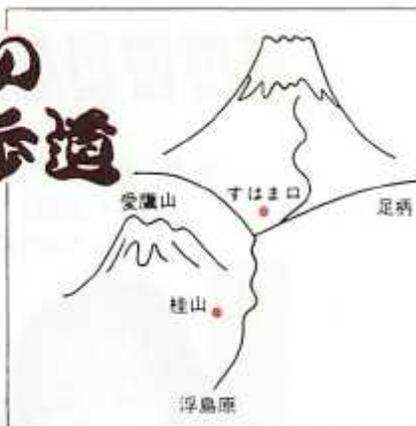
似たるすがたや……

表現は石眠の人情をしのばせるもので、刻まれた書体の流麗さも見事です。当地方の祭りや各供養塔は野の文化であり庶民文化が表現されています。俳諧文芸が中心でした。裾野地方の神社仏閣への献句奉納額は幕末から明治20年代にかけ十数枚を数えることができます。やはり神社仏閣は創作活動の精神的、文化的施設の役割を担ったものと思われれます。

資料提供 定輪寺 中村雄爾住職



寛政2年（1800年）燈籠の由来



歴史の散歩道

⑥7 市史編さん委員
芹沢充寛
准后道與と
廻国雑記

聖護院准后道與は、文明18年（1486）6月6日京都を出発。東国各地

を旅をしました。がその時の紀行歌文集が「廻国雑記」です。

道與は近衛房嗣の子。近衛家は藤原氏の一族五攝家の筆頭格。中世社会の政治史、文化史のうえで指導的役割を果たしました。道與は紀行文、歌人としてもすぐれた教養をもった人物でした。

道與が愛鷹東麓の古道を歩いたのは描写からみて11月か12月の晩秋。廻国雑記には

『浮雲のあしたか山は早けれど
なづめる駒ぞ進むともなき

桂山を越え侍れば、いづれの木末も
落葉して、物さびわたり見えければ
冬枯し名のみ残りてかつら山まさき
をもったも色ぞ稀なるすはま口とい
ふより、ふじの麓に到りて、雪をか
きわけて、よそにみしふじの白雪け
ふわけぬ心の道を神にまかせて
富士のむら山とて、大嶽の麓に侍

り。所々に紅葉の残れるをながめて
高ねには秋なき雪の色さえて紅葉
ぞ深きふじのむら山と

「景ヶ島山略縁起」の版木が仙年寺
に保存されていますが縁起には葛山氏
道與准后、西行法師などが名文で刻ま
れています。

当時、宗祇は京の北野会所花の本、
宗匠として連歌で活躍。道與が足跡を
残してから15年後定輪寺に葬られました。
また文明14年「葛山某、駿河国佐野
郷を押領」の資料からみて、おそらく
街道からは葛山城や城主館が見えたこ
とでしょう。

鎌倉―小田原―箱根山―田子浦―三
保―浮島原―足柄山―大山などその間
裾野では、愛鷹山・桂山（葛山）・す
はま口（須山）の地名が見えます。
道與は須山から富士山にも登ったの
です。

廻国雑記は、500年前の愛鷹東麓の風
景を鮮やかに甦らせます。道與の貴人
自由人の人柄が伝わってくるような気
がいたします。

資料：群書類従



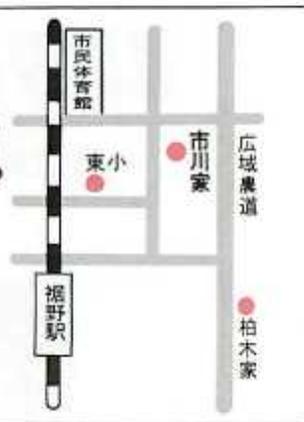
通称甲州街道から葛山城址を望む

歴史の散歩道

一宮尊徳と経営

68

市史編さん委員
芹沢充寛



二宮尊徳は通称金次郎と言われ、天明7年(1787)相模国栢山村(小田原市)に生まれました。少年時代、酒

匂川の洪水で田畑は砂礫地、父は病気で貧困のどん底におかれ、日夜勤労と勉学に励み二宮家の再興を果たしました。

金次郎は農民出身。自己体験を通して農村の復興指導者。今のことばなら農業経営コンサルタント、経営診断のエキスパートと言えるでしょう。

金次郎が活躍したのは徳川時代末期、しかも近世三大飢饉の一つ天保の大飢饉に直面しました。

飢饉にたいして天保7年12月、小田原藩主大久保忠真は貧窮者へ施米、8年2月忠真は領民救済のため御手元金千両を給付、3月から小田原藩内4万人に施米しました。

その一連の救済事業は郷土の領内各村、公文名、稲荷、茶畑村外にも施され、それらの実行にたずさわったのが金次郎でした。

駿東教育史には、「金次郎は天保8年3月に救済金を貸付けているが、公文名村の場合、その貸付金の請取控帳からは金次郎の意図がはっきりしない。」として資料を示しています。

「天保八丁酉年三月 二ノ宮金次郎様乃被下金小前割合帳
天保八丁酉四月十四日 御殿様御手元金頂戴小前江割合帳 公文名村稲荷村」

さらに「茶畑村報徳金御拝借取調書上帳」では、同村の生活状況を3種に分類し貸付しています。返済は無利子5年年賦。麦作の収穫、日掛け、月掛けの積立金方式を示しています。

金次郎は、合理的な仕法(方法)と同時にバックボーンとして「天道と人道の一致」そのために分度(財産相応の計画性)推譲(分度の外を譲る)報徳(天地の恩義に報いる)を説いています。

印幡沼分水開削など幕府の普請役格、日光領、相馬藩の財政再建などで活躍。新春を迎え変動する経済状況の中で尊徳の足跡を再評価する意義はあると思われまふ。

参考資料 駿東教育史

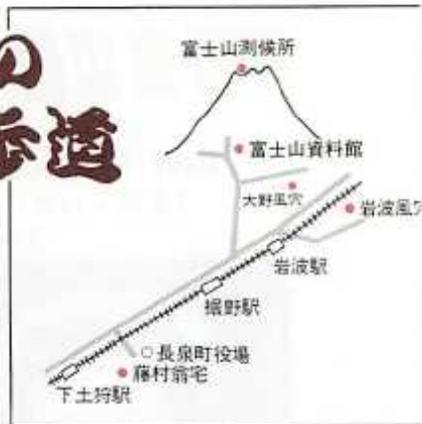
二宮尊徳(中央公論社)

柏木家・市川家資料



二宮金次郎像(東小裏門)

歴史の 教歩道



69

市史編さん委員

芹沢充寛

元富士山測候所長

藤村郁雄翁

藤村郁雄翁は、市民大学講座の講話、富士山資料館開館10周年での祝辞など、本市にはとても縁の深い方です。

市民大学では、満83歳の高齢にもかかわらず自然科学者の視点から2時間にわたり、富士山は生きている、のテーマでお話されました。

翁は、旧制盛岡中学を卒業。5年生の時先輩が勤務する盛岡測候所を訪れ、気象観測に魅かれて、卒業と同時に国立中央気象台附属測候技術官養成所に進みました。

翁が富士山で初めて観測したのは昭和4年。同7年は世界各地で同時に実施された「第2極年観測」に当たり気流、気圧、地磁気、日射などのデータ観測。その観測事業が終了しようとした時、翁をはじめ若手の情熱で継続させたというエピソードを伝えます。

昭和9年1月5日、富士山測候所で新年を迎えて交代の日「オーイ交代だ」

と叫びながら登ってきたのが新田次郎氏（作家）らでした。

富士山頂での常時観測は昭和7年、翁は同13年から同43年退官に至るまで富士山測候所長。その間敗戦の年に沖縄、熊本測候所長を数か月歴任。

昭和9年ごろの富士山頂は、沸騰点85度の蒸気が噴出。同19年太平洋戦争中山頂でグラマン機の機銃掃射を浴びる。同39年近代的なレーザー機器の設置、山頂での自然との闘いなど実に豊かな経験をされています。

翁は、火山弾の生成について「火山弾は噴出した溶岩が空中で回転しながら飛んで砲弾状になる」と言うのが富士山地質研究の権威者、津屋東大名普教授の説ですが「溶岩の増場の中に落下した岩石などが芯となり、その外側が溶岩で覆われ火山弾ができる」というのが藤村説」と説明されます。

翁の自然科学者としての一徹な姿勢、緻密な観察、そのバイタリティー、すばらしき仲間と友情、学ぶべきこと多いです。富士山資料館で翁の貴重な資料展ができればと思います。

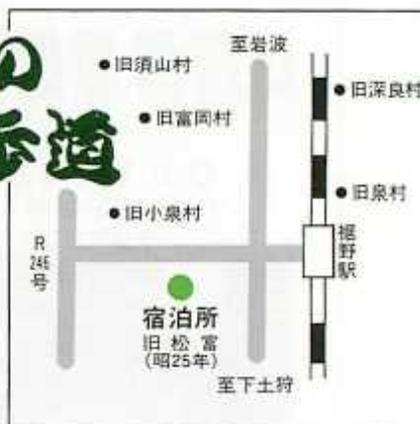
〔資料〕検査時報の報文など(昭和33年)レジュメとお話(平成3年)



市民大学講座 藤村先生 (平成元年)

歴史の教歩道

⑦〇 市史編さん委員
芹沢充寛
W・H・OとDr橋本



裾野市市民大学講座で、W・H・Oと予防医学のテーマ、講師は橋本達一郎博士。「世界で年間1400万人の子どもたちが病氣、飢え、戦災などで死んでいる。EPIなど救援活動をしているのがユニセフ」と印象的な話をされました。

氏と裾野との結びつきは昭和23年からです。当時、結核は「亡国病」とも呼ばれ、同26年に結核予防法の制定、年間約10万人が死亡、死亡率は第1位。そして、戦後の混乱やら食糧事情がきびしい時代でした。

国立予研グループは、ツベルクリン反応、BCGワクチンの接種を駿東郡を対象に実施、旧小泉・泉村をはじめ各町村や各学校の協力で接種の有効性をめぐる貴重なデータを得ながら結核と闘ってきました。氏は「ワクチン・治療薬が進歩しても、開発途上国では毎年、感染性の結核患者は約600万人発生…300万人が死亡……」

わが国の結核対策の成功は注目……得られた教訓……と述べています。

氏は、東大医学部卒、国立予防衛生研究所結核部室長を経て筑波大学（基礎医学）名誉教授。象牙の塔にこもることなくW・H・Oとユニセフの顧問として、発展途上国の医療指導。5か国語が堪能で、退官後もジュネーブ・ブラジルで活躍中。温厚で尊敬できる人柄。氏の祖父は勲選議員、父は弁護士、現最高裁大塚判事は従兄に当たります。国際交流が進められていることはすばらしいことですが、ユニセフへの年間国民1人当たりの募金額、ノルウェー・スウェーデンが約10ドル、日本は17番目で0・25ドルが現実です。

W・H・Oやユニセフ、難民救護活動など、日本が私たちが日常不断に地味な活動を実践してきたならば、湾岸戦争でも独自の平和主義が買けたのではないでしようか。

なお、氏は筆者の義兄です。

(註) W・H・O (国連世界保健機関)

ユニセフ (国連児童基金)

EPI (予防接種普及事業)

〈協力者〉

小林慶一様 (元駿東市町村会事務局長)



昭和63年裾野市市民大学講座
橋本達一郎博士

歴史の散歩道 ⑦

富士山と裾野の風穴



富士山博士 津屋弘達先生

つやひろみち

富士山の地質は、基盤の第3紀層から3776mの高さ、典型的なコニエの山容。現在の富士火山は、小御岳火山、古富士火山の2つの古い火山の上をおおってできています。

津屋先生は、宝永火山上部に見える赤岩を小御岳火山の頂上部であることに発見し、富士山山体の構造を明らかにしました。それまでは側火山と考えていました。

津屋先生は、東京大学名誉教授、元東大地震研究所長（地質学）。昭和43年に過去35有余年にわたる富士山の地形、地質の調査研究の成果を「富士火山地質図」として発表、大きな反響を呼びました。

富士山歴史に記すとおり、溶岩洞穴の調査は、世界的にも例がなく20以上の洞穴にもぐり、新発見の洞穴は36か所を数えました。「津屋先生は満70歳近くのご高齢。時にはみんなしてザイルでつり下げ、つり上げ……」て調査。裾野市では、大野原、茶畑、裾野、十里木水穴、樹穴など各風穴の調査。

「十里木地質断面図」などの資料は先生の指導の元、日本火山洞窟協会々長小川孝徳氏を中心にまとめられました。昭和13年から3年間、勢子の近くで石油の掘削を行った投資家がありました。その際津屋先生は80m、第3紀層まで掘削したコアを観察したことが富士山成因の基礎資料になったそうです。

むろん、石油は出るはずもなし。この時、津屋先生が須山の渡辺徳逸先生の所へよく訪れたそうです。

若き日、地質研究者と地元の人、岳人が情熱を込めて富士山をめぐる話を弾ませたことでしょう。

調査に参加された渡辺吉己氏は、津屋先生の印象を、「朴訥で学究肌の研究者。富士山を縦横に歩き、人柄は温和で親近感を覚える」と語っています。

先生は昭和63年満86歳で亡くなりました。なお、富士山の自然、風穴などの管理保護は津屋先生の心からのメッセージです。

※資料並びに協力者

渡辺徳逸先生「富士山と須山」講話
渡辺吉己氏

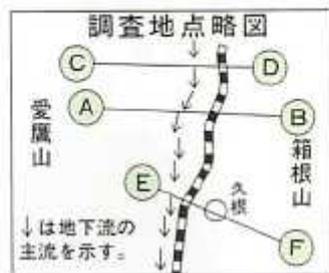
「富士山歴史」

文・市史編さん委員 芹沢充寛



津屋先生と風穴調査
(上段左から3人目・昭和49年)

歴史の散歩道 ⑦2



富士山麓の地下川と落合博士

箱根山と愛蔵山の褶合谷は富士落岩流でおおわれています。裾野市はその上につくられた街です。

東大青柳博士は大正4年ころから昭和5年にかけての「富士山麓水源地調査」の中で、「地下には他に類のない地下川が流れている」と報告されました。

その後、昭和25年に至り、小泉、泉深良村の依頼で農林省技術研究所が調査を実施。上水道計画が目的であったようですが、一連の調査は落合敏郎技官が指導にあたりました。

裾野地方の帯状の地に調査地点を設定し、電波探査機を使って地下流を探査。調査報告「地下川の機構とその規模」から紹介しましょう。

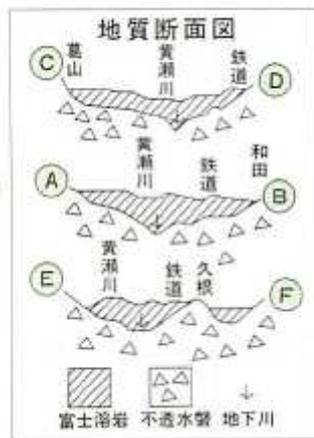
富士火山の噴出にかかる三島溶岩流は、愛蔵山及び箱根の褶合谷を延々と流下し、地表における岩石は三島市まで届いています。ボーリングデータによれば、同溶岩流の最末端は沼津まで到達しているそうです。そしてこの溶岩流の中途には数々の湧泉群が存在し、その総吐出量は25 mg/secに及んでいます。

この地域を流れる黄瀬川は、集水面積が200²km²にも達しているにもかかわらず、濁水期には流水がなく、奇異なことと思われていました。しかし、本調査によって地下川的全貌が把握され、この謎は一気に解明されたのです。姿を消した多量の流水は落岩流以前の河川、すなわち現在の溶岩中の地下川を流れていたのです。

落合先生は「地下川の研究」で博士号を取得。その後の調査を含めて、裾野町の上水道供給事業、企業誘致計画といった都市的発展に備えた資料を提供したのです。また地下ダム、地下水汲上げ規制など裾野市の将来にかかわる課題にも貴重な意見を述べています。田口勝夫氏は「落合先生は学者肌ですが、ぶらな親近感のもてる磊落な人柄で、行政面でもたびたびアドバイザーをいたっていた」と語っています。

※落合先生の経歴
東大講師、日本地下水学会会長を歴任
現在、原子力安全委員会専門委員
※資料並びに協力者
農林省農業技術研究所電探調査資料
田口勝夫氏 元裾野市企画調整部長

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



歴史の散歩道

73



裾野町の合併と少数意見

市制20周年は、私たち自身が地方自治意識を再確認し、市の将来を考えるのに、よい機会でしょう。

一つの出来事を紹介します。

昭和31年2月23日、裾野町議会議員25名中、14名が連名で次の議案を議会に提出しました。

『議第11号・市町の合併について』
 駿東郡裾野町を廃しその全部の区域を三島市に編入昭和31年4月1日から施行することを静岡県知事に申請するものとする。

町民の目には、明らかに可決されるものと映りました。

当日の議会は、合併による「福利増進」を標榜する多数賛成派と、これに反対する少数派とに分裂。反対派の根拠は「裾野町となつてまだ4年。行政面での主体性の発揮はこれからであるし、町民のコンセンサスも得られていない」というものでした。

議会は分裂したまま、合併反対を主張する藤原町長の信任決議を議長に要求。超立による採決の結果、信任わず

か3名で信任案否決。これを受けた町長は、直ちに「議会解散の通告」を、議長を通して発表。合併問題は、その審議に入る前に議会解散となつて、終止符を打ちました。町長不信任による議会解散は、全国的にもまれなケースでした。

この幕切れの背景には、藤原町長の知略と、6名の少数派議員の巧みな連携プレーの存在を忘れることはできません。6名の議員は信任採決の際、意図的に2分することによって、賛成派の目をカムフラージュするのに成功したのです。解散による審議不能に持ち込むことによつて、かろうじて合併を免れたのでした。

もしも、三島市との合併が行われていたとしたら、「裾野市」という名称はなかったことでしょう。

※6名の元町議員―藤谷佐一、中西嘉一、渡辺義夫、芹沢五郎、川口可夫、勝又治作 (以上、順不同、敬称略)

※資料

裾野町商工会陳情書

裾野町青年団「町民大会」案内状

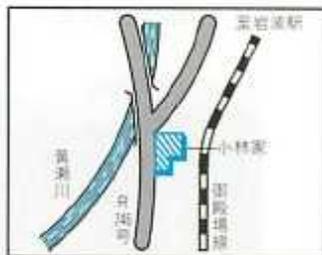
裾野町弘報 他

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



旧裾野町役場・昭和40年撮影
 (現在、勤労青少年ホーム)

歴史の散歩道 ⑦4



『工業立町』と小林市長

裾野町弘報（昭和31年2月発行）は、町村合併問題と戦後の地方行政のあり方について、次のように報じています。

「市町村の規模が余り小さくしては、町村自治が弱少過ぎて経済力に弾力性がなく、何の事業も起こすことができない故、適正規模の合理化を図り、地方自治体の経済力を強化し自治の発展を……」

こうした世論を受けて、昭和27年4月1日に泉村・小泉村が合併し裾野町が誕生。31年9月に深良村、32年9月に富岡村と須山村が相次いで合併。

この転換期に小林秀也氏（第3代裾野市長）は、深良村長（昭和22年4月1日～31年9月）、並びに裾野町長（昭和35年1月～43年1月）を務めました。この間、『工業立町』を町是として提唱、裾野町の施策の中心に据えました。

昭和30年代『三割自治』と表現されたように、地方財政の貧困のため、地方自治の自主性、独立性は著しく低下していました。ちなみに、裾野町の昭和35年一般会計租税総額中における町税

の比率は39・7%。この状況を独自に突破していく施策の一つが『企業誘致』であり『工業立町』政策でした。

最初に誘致、進出してきた企業が三菱レイノルズ㈱でした。敷地5万坪、資本金12億7000万円、従業員約100人。アルミの加工製造を行う国際的な会社で、町民を驚かせたことを覚えています。その後、矢崎総業、関東自動車工業、トヨタ自動車工業など相次いで進出して来ました。

企業は、①広大な土地②工業用水③労働力④交通条件などに加えて、裾野町の企業誘致条例などの優遇措置を受けました。減税措置を講じて企業を誘致し、その結果、長期的な町財政の確立、雇用の拡大、街の活性化、地方産業への経済効果などの波及効果が期待されました。

小林市長は、深良村の旧家を継がれたためでしょうか、「鷹場」で人間的な包容力にあふれ、信頼でき親しみの持てる人柄」と地域住民や部下のだからもが異口同音に語っていました。昭和53年、享年75歳。

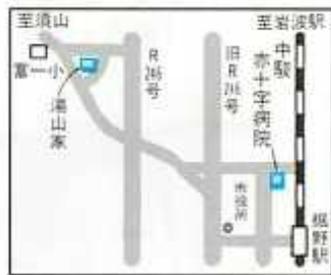
※資料▼裾野町弘報▼東駿地誌他

（文・市史編さん委員 芹沢寛寛）



現在の三菱アルミニウム㈱
（旧三菱レイノルズ㈱）

歴史の散歩道 ⑦⑤



公的医療と湯山元県会議員

明治12年、駿東郡長に就任した江原素六は医療行政に力を注ぎ、駿東病院第二分院を佐野に開設。しかし、公立病院の経営は難しく、同病院は19年には私立へと移行しています。

住民にとって、保健医療は生活の基本ですが、当時は開業医院も少なく、地域医療は極めて貧弱でした。

こうした状況の中、昭和8年、若狭森に小泉村外三カ村組合立中駿病院が開設されました。当時の公的医療は、公衆衛生、伝染病予防が中心であったためでしょうか、周辺住民から反対の声が挙がったとも言われています。

この病院建設に関する規約の中に、当時の富岡村村長湯山芳太郎代表者名を見つけることができます。

「昭和6年7月27日議決規約第一号 駿東郡小泉村外三カ村中駿病院組合規約中第三条ヲ左記ノ如ク改正……伝染病棟並普通患者診療二関ス……昭和13年6月18日提出。同日議決。

駿東郡小泉村外三カ村中駿病院
組合管理 富岡村村長湯山芳太郎」

ちなみに歳入予算は7400円。建物は旧小泉小学校の古材を利用。マネーシメントを市野良作氏に委託し、市野直次郎氏も応援しています。

中駿診療所は後に中駿赤十字病院となり、昭和45年には、老朽化した木造建築から近代的な建物となりました。当時、経営改善と医療体制の充実に努力したのが、諏訪院長、苅部副院長らですが、筆者も情熱を注いだことを記憶しています。

中駿赤十字病院は、今ではこの地域に不可欠な公的病院として、住民の信頼を受けているのは周知のことです。湯山元県会議員は、長い間、地域医療の実情を県政に反映し、助成金などの獲得に奔走されました。

湯山芳太郎は、御宿の旧家、「湯山」の当主。旧富岡村村長を9年余り、県議員を8年歴任。「旦那」という表現がびつたりするような風格を漂わせ、気骨があり、人情味あふれる方でした。昭和57年、満80歳で亡くなりました。

※資料及び協力者

▽渡辺俊一氏資料▽湯山博氏

▽日赤病院ニュース(昭和46年芹沢記)

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



現在の中駿赤十字病院

歴史の 散歩道 ⑦⑥



富士山資料館と岩崎元市長

昭和46年1月、市制が施行され、翌47年1月、岩崎龜市長（第2代）が就任されました。当時、工場誘致により進出してきた各企業が生産活動に入り、活気を呈した時期でした。

岩崎市長は、裾野市総合開発計画基本構想をまとめ、裾野市の将来のあるべき姿を示しました。現在の都市計画の原型と言えるでしょう。また、岩崎市長は、絶えず文化施設の必要性を指摘し、「公共施設は黄瀬川沿いに設けることが望ましい」という言葉が示すように、親水、河川公園的な発想が印象に残ります。

昭和43年、鈴木忠次郎翁の趣意を生かして鈴木育英図書館を開設。青少年の育英に特色がありました。岩崎市長は、当初から理事、理事長を務め、地域の文化、教育の情報センターとして図書館の重要性を強調してきました。

また、富士山資料館建設計画は、昭和50年、岩崎市長の手で具体的に示され、富士登山古道須山口の特徴や富士をめぐる文化について、渡辺徳逸翁の

進言を基礎に深い討議が行われました。富士山資料館は昭和53年に開館。来年は15周年を迎えますが、今夏は、4900人の見学者が訪れました。

岩崎龜翁は、旧制沼中、東京農大を卒業。同大学助手、日本大学政治科卒。昭和12年、田万農業学校教諭、15年には沼津農業学校（現県立沼津城北高校）校長の後、重要な公職を歴任。

昭和22年から46年まで静岡県議会議員を務め、その間県議会議長に選出され、県政に携わってきました。ことに文化教育面、例えば私学振興などに大変な努力を払われてきました。

岩崎家は旧佐野村の旧家。祖父の佐十郎は明治維新時の当地方の政治、教育の指導者で、九成の併号を持つすぐれた俳人。同家には大町桂月が長逗留し、また、龜翁は歌人牧水と意気投合し飲み明かしたという話を伝えています。龜翁自身も、麦菜と号し、多くの作品を残しています。人柄は温厚誠実、「真からの文化人」と多くの方が評しています。昭和55年没、享年80歳。

※資料▽「岩崎先生の追憶」
建設協力▽須山振興会農事組合

（文・市史編さん委員 芹沢充寛）



富士山資料館

歴史の散歩道



歌人牧水から秋灯への手紙

鈴木君、先日は有難う。頂戴もの、早速あの夕方と二、三日前とに二回調りし、まことに結構にいただきました。あとまだまだ楽しみにとつてあります。土のこと色々とお心にかけて感謝します。……このさまり様により都合ではお世話願うやも計り難く、今しばらく、御待ち下さいまし。……忙中とり急ぎ右迄。

十一月二十三日 牧水

鈴木秋灯様

鈴木波一（秋灯）翁は、「牧水は、沼津を永住の地と定め、土地を探していたが、中々適当な所がない。裾野にしようかと私に相談があつた。沼津に家を建ててからも、裾野に庵を建て、住もうと真剣に考えていた」と語っています。牧水は明治18年宮崎県の匠者の家に生まれ、大正9年沼津へ転居、創作、歌集の出版活動、そして昭和3年44歳で亡くなりました。

現在、市民文化センターの1室に秋灯翁所蔵「牧水の遺墨」が展示されています。牧水の遺墨は過去の

記念碑ではなく、郷土の未来への豊かな文化的財産として、継承していく内容を持つていてほしい。

①牧水と秋灯翁との親交の中に、人と人との出会いのすばらしさがある。

②裾野地方で創られた歌、紀行文から受けた文学的感動。

③牧水が裾野を歩いたのは、筆者の調査でも12度以上、いかに裾野の自然と風物、人々を愛していたか。

④牧水は、裾野に庵を建てて住もうとした想いを残している。

秋灯翁は、牧水の没後30年間、遺墨を2人の世界のこととして公表することなく温めてこられました。

そこには、新じやが、のあだ名を持つ秋灯翁のみずみずしい農村歌人ならではの木訥でおおらかな氣質や、人情の機微を知りつくし、会う人を楽しませてくれるユーモアに満ちた人柄を見ることができます。

大正12年、農村の青年の結婚祝いに見えた牧水。その青年秋灯翁も満91歳。※資料▽「牧水の遺墨」とお話、秋灯翁▽仮称「裾野牧水・秋灯記念館建設計画」昭和62年5月 杉本惇士・芹沢充寛（文・市史編さん委員 芹沢充寛）



鈴木秋灯翁夫妻

歴史の 教歩道

78



井上靖少年から大庭景申少年へ

大正15年10月、金沢市から深良村大庭景申あてに手紙が届きました。

「大庭君 卒業後の第一のおたより。……僕は確に今其寂しさに面してゐる。まあこんな事はぐちだ。四月から今までは殆ど小説ばかりよんだ。

短歌集も十五六冊ばかり。台湾では朝から晩まで図書館通ひをした。そして九月になつてなんとなく恐しい様な氣持になつて机に向ひだした。

君は多分準備に成れりの勢ではないかと思ふ。ずつと四月から深良村の方に籠城でしたか？つまらない事を而かも乱筆にて失礼。……略……井上靖 大庭 兄」

旧制沼津中学を卒業、2人は同級生ともに浪人時代の文通。「僕は確に今其寂しさに面している」伊豆から見れば北陸の金沢は暗く、孤独、不安……。文面からは自任風の『夏草冬濤』に描かれた少年の成長した心の動きを見ることができます。

作家井上靖は、裾野とは無縁かと思つていました。ところが、箱根西麓の

深良村に籠り受験準備に余念のない友人 大庭君への温かさにあふれた手紙。それは井上少年自身への励ましでもあり、深い印象を残したことでしよう。他の手紙には9首の歌も見られ、井上文学の初期の未発表作品として貴重。灯みな一つとなりて映り来ぬ 泣くに流れし吾が眼には

翌年、井上靖は旧制金沢高校へ、大庭景申は東京の豊島師範学校へ進学。浪人からの脱出と同時に文通も終わりました。その後、同窓会で旧交を温めた時の様子は大庭先生からうかがいしました。

そして、一連の手紙は「友情」を大切にして65年間公開することなく保存されてきました。

井上先生は友情について、「一夜酒席をともにしただけで百年の知己の交わりを要求するような相手を……私もまたそうした氣持ちを……禁じている」と記しています。井上先生は去る2月、大庭先生は去る8月、ともに満83歳で亡くなりました。

※資料▽旧制沼中22期だより——井上靖追悼号——▽『夏草冬濤』井上靖著

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



井上靖少年、自筆の手紙(大正15年)

歴史の散歩道



市史編さん事業と牧野驥先生

福野市史資料目録第一集「富沢渡辺家文書」の整理、解読や、亡くなられた喜多川先生の後を受けて、「深良用水の沿革」を仕上げられたのが牧野驥先生でした。

牧野先生は、市史編さん準備員として昭和49年から5年間、古文書の収集、整理、解読に従事され、市内旧家などの多数の資料を手掛けてこられました。現在、市史編さん事業が順調に進んでいるのは、牧野驥、大庭景申先生方の地味な努力が土台になっていると評価されています。

牧野先生は旧市民会館の1室、古文書に囲まれた中でコツコツと整理し、傷んだ文書は裏打ちして、祖先のぬくもりを感じるかのように大事に扱ってこられました。また、解読にあたっては、時間を費しても徹底的に究明していく科学者のような姿勢を持っていました。謙虚な人柄と裏打ちされた自信から出てくる厳格な一面もありました。福野には、中世の大芸術家、連歌の宗祇の墓所があり、俳句は郷土の伝統

文化として定着し、神社、寺院にあげられた俳句の奉納額は10数枚を数えることができます。

封建時代において俳句は社会から離れた自然の世界であり、人間性の発見と個人の自由な世界でした。

駿遠豆の俳人の系譜の中で「六花庵」は知られていますが、沼津に「種玉庵」の庵号の俳人がおりました。海の本連水もその中の1人ですが、種玉庵三世を継いだ人物に牧野鳥灯がいました。鳥灯の孫が牧野驥先生。

牧野家には絶えず俳人たちが集まり句会を催し、驥先生はそうした文化的環境の中で幼少時代を過ごしました。後に、漢学や国文の教師として進まれ、池谷観海に私淑されたこともうなずけるような気がします。

種玉庵の俳関(額)は流の本連水、印は牧野家に保存されているそうです。制作の秋建やかに日々清し
驥先生作。昭和63年満78歳で亡くなりました。

※資料▽駿遠豆歴史物語

協力▽牧野節和、牧野己六(敬称略)

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



富沢渡辺家文書 牧野先生解読
(市史資料所在目録第1集他)

歴史の散歩道



夕暮になっても光はある

「夕暮になっても光はある」―特養
京母の看護絵日記―

この本は、御殿場市深沢の特別養護老人ホーム「御殿場十字の園」に勤務されていた土田セイジ（看護婦）の絵、林富美子（医師）の文による作品集です。アメリカの化粧品メーカー、エイボン・プロダクツ社が日本で設定した「エイボン女性1985年度教育賞」受賞作品。同賞は社会教育、学校教育、情操教育など広く学術、教育の分野で活躍している女性に贈られるものです。

「移行」

老いるとは脱皮することです。苦悩を乗り越けて成長することです。物質的な世界、自己中心的な世界から抜け出して、宇宙の中に移行することなのです。待つておられる神さまのところに飛び立つことなのです。そこでは死は終わりではなく、新しい出発なのです。

老人介護に対する林医師の深い愛情の詩、土田看護婦の描いた心温まるさわやかな水彩画。絵日記には園内の老

人の生活が描かれています。2人のカソリック信者としてのヒューマンな心を随所に見ることが出来ます。

林医師は「老人に対する無関心、老人疎外が多くの老人を精神障害に追いやっている。その結果、ある老人は無口となり、ある老人は恍惚になっている。人間の精神活動は30歳から上昇し、70歳代を過ぎてもお伸びる。身体的老化を支える援助者さえいけば、知能は衰えるどころか豊かな経験を生かしてぐんぐん深まる」と指摘しています。が、心すべき言葉です。

林医師は、昭和4年、東京女子医専卒業。国立ライ療養所多摩全生園の医師になってから、昭和53年復生病院を退職するまで約50年間をハンセン氏病患者の治療にあたり、「吉岡弥生賞」を受賞。

土田セイジさんは、慶応病院、聖マリア病院、不二聖心女学院、沼津医師会病院に勤められ、現在、76歳。裾野市石脇に住んでいます。

※資料・協力マ土田セイジ様

（文・市史編さん委員 芹沢充寛）



「夕暮になっても光はある」より
土田セイジさんの絵

歴史の 教歩道



富士山麓国際音楽祭と 金昌国教授

音楽に国境はなし。美しいシンフォニーは、国、民族、宗教、文化、生活習慣などの違いを越えて、人々の心に深い感銘を与えます。

去年12月7・8日、第1回富士山麓国際音楽祭が裾野市民文化センターで延べ2500人以上の人々を迎えて催され、成功裡に終わりました。

裾野市には富士の地下川が流れ、富士登山道須山口の古道が通り、古代から現代に至るまで詩歌や絵画が描かれ、富士をめぐる文化が豊かに創造されました。音楽文化、地方文化、人々のバックボーンを創りあげていく背景として、富士山麓は格好の舞台のように思われます。

第1回国際音楽祭は、文化庁管轄の「文化芸術振興基金」の対象となり、その理由として①地方での音楽文化の国際的文化交流②企画とその内容の高さ③新しい文化センターと共に、市民自身の文化活動として継続性があるなどが評価されたと聞いています。

富士山麓国際音楽祭管弦楽団は、裾野市にふさわしい名称で、市民の心を弾ませる響きがあります。

指揮者・フルート奏者である金昌国先生は、現在、東京芸術大学教授、国際コンクールでトップに、ドイツ・ハノーヴァ国立歌劇場管弦楽団の首席奏者、アンサンブル・オブ・トーキョウの指揮者。私は、すばらしい実績を持つておられる金先生と、友人のピアノニストを通して5年程前から友情を温めてきました。師り気がなく、率直で、未来を語り、ユニセフへ救護する人柄。『バツハは最も高い山、モーツァルトは最も美しい山』が金教授の言葉。私は音楽の素養はなく、未来を語ることで意気投合したものでしょう。

そして音楽祭が継続する中で、「交響曲富士山」のような堂々とした曲が創作できればと希っています。

金教授が裾野を訪れたのは、市民大学コンサートを含めて10余回。

※資料▽第1回富士山麓国際音楽祭プログラム▽尾高尚忠賞30周年記念コンサートN響との共演。NHK放映

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



第1回富士山麓国際音楽祭 金昌国先生方

歴史の散歩道

82



俳人 勝又一透翁と 歴史の散歩道

古寺、桃園定輪寺境内の句碑。
交友といふこと雲と秋草と

見事な自然石に刻まれています。深
長出身で俳句誌「岬」の主宰者である
勝又一透翁の句です。

一透翁は、正岡子規、高浜虚子の花
鳥風詠を受け継ぐ富安風生の四天王の
一人と言われて活躍している俳人です。
その作風、おおらかなリズムにひかれ、
全国から慕う俳人も多いと聞きます。

定輪寺には、昭和62年文化の日に地
元の俳人と文化協会の手で、一透翁傘
寿(80歳)を記念して建立されました。

なお、一透翁の句碑は、母校深良小
学校の校庭の一角にも、平成元年開校
100周年を記念し、同窓会によって建立
されています。自然石に刻まれた句。

いつ来てもふるさとはよし五月富士
人生は短く若姪は長し、自然と人間
を豊かに表現された作品が生活の中に
存在するのは実に楽しいと思います。

「歴史の散歩道」では、郷土に由緒あ
る人物とその足跡を紹介してきました。

ほかにも浪花節の都小円次(?)、愛鷹山
林の渡辺孫三郎、佐野原神社の谷千城、
画家の和田英作、芦湖水利組合の渡
辺義夫、教育者の柏木魁太郎、大庭寛、
地方自治の芹沢孝三、小林久五郎、勝
又寿太郎、神官の清水藤吉、深良の松
井家や御宿の湯山家をめぐる人々など
は、別な機会に紹介しましょう。

また、今までの記述の中でも、(1)武
田信玄に仕えた御宿監物友綱、(2)愛鷹
山共有林の勝田三平、(3)三島市と裾野
町の合併問題に係った人々などは、
今後も史実に即して調査し、追究して
いきたいと思っています。

人物が自由を獲得、人間性の擁護、
個性の発揮、自己主張をし、それを通
して社会に影響を与えてきたからこそ、
魅力があるのです。

しかし、当事者の主観とは別に、客
観的に、歴史的に厳しい評価を受ける
こともあるでしょう。

※資料▽定輪寺▽深良小学校

(文・市史編さん委員 芹沢充寛)



定輪寺 一透翁句碑

